

# 九州大学留学生センター紀要

## 第14号

### 目 次

#### (論 文)

- 中国人学習者の発話における反復と省略の問題 ..... 大 神 智 春 ... 1
- アジアにおける大学連携のための基礎的研究  
 — 共同カリキュラム・プログラム開発に関わるフィージビリティ・スタディ(1) —  
 ..... 岡 崎 智 己 ... 11

#### (報 告)

- 日本語補講コース (JLC)..... 小 山 悟 ... 21
- 日本語研修コース実践報告 ..... 因 京 子 ... 37
- 全学教育科目の日本語 ..... 清 水 百 合 ... 47
- 比較社会文化学府での実践報告 ..... 因 京 子 ... 51
- 日本語 CAI(Computer Assisted Instruction)コース ..... 鹿 島 英 一 ... 53
- 日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム ..... 岡 崎 智 己 ... 55
- 日本語・日本文化研修コース ..... 清 水 百 合 ... 61
- JTW Program 2002 - 2005 ..... 今 井 亮 一 ... 67
- 九州大学サマーコース ..... 岡崎智己・高原芳枝 ... 79
- 2004年度 九州大学留学生センター留学生指導部門報告 ..... 白土 悟・高松 里 ... 91

# International Student Center Annual 2005 Kyushu University

## No.14

### CONTENTS

#### (Articles)

- Problems of repetition and ellipsis in Chinese Learner's utterances  
..... OHGA, Chiharu ... 1
- International Collaboration in Asian Universities: A feasibility study  
for collaborative curricula ..... OKAZAKI, Tomomi ... 11

#### (Reports)

- Japanese Language Courses for International Students (JLCs)  
..... KOYAMA, Satoru ... 21
- Preliminary Japanese Training Course ..... CHINAMI, Kyoko ... 37
- Japanese Language Classes for Undergraduate Students  
..... SHIMIZU, Yuri ... 47
- Japanese Language Education Program in Graduate Studies  
..... CHINAMI, Kyoko ... 51
- Computer Assisted Instruction Course for Japanese  
..... KASHIMA, Eiichi ... 53
- Preliminary Course for Japan-Korea Joint Exchange Program  
in Science and Engineering ..... OKAZAKI, Tomomi ... 55
- Japanese Language and Culture Course (JLCC) ..... SHIMIZU, Yuri ... 61
- Japan in Today's World Program (JTW)..... IMAI, Ryoichi ... 67
- Asia in Today's World Program (ATW)  
..... OKAZAKI Tomomi • TAKAHARA Yoshie ... 79
- Advising and Counseling for International Students  
..... SHIRATSUCHI Satomi • TAKAMATSU Satoshi ... 91

# 中国人学習者の発話における反復と省略の問題

The problem of repetition and ellipsis in discourse of Chinese students

大神智春\*

## 要 旨

本研究では、結束性を保つための一手段である同一語句の反復と省略について中国人学習者がどのような問題を抱えており、それがどのように発話の「分かりにさ」「不自然さ」に関わっているのかを考察した。調査の結果、「主格」「を格」「と格」「の格」の不必要な反復が問題となっていることが確認された。「主格」「と格」「の格」の反復はディスコース・トピックやサブ・トピックの反復と関わっており、これらの不必要な反復が旧情報の不適切な強調や不適格な箇所での話題転換につながると考えられる。「を格」の過度の反復は焦点化すべきでない旧情報の焦点化につながるため、発話が「分かりにくく」「不自然な」ものになると考えられる。

### 【キーワード】

中国人学習者、反復、省略、ディスコース・トピック、サブ・トピック

## 1. はじめに<sup>1</sup>

中国人学習者（以下学習者）は、中国で日本語の初級課程を終えて来日しても、発話が「分かりにくい」「不自然だ」とよく言われる。本研究では中国国内でコミュニケーション能力を効果的に習得することを目指し、そのための会話の授業の方法を探る基礎研究として、初級修了時点で学習者は談話レベルでどのような問題を抱えており、それがどのように「分かりにくく」「不自然である」という印象に関わっているのかを考察する。

## 2. 研究の目的

### 2 - 1 談話の構造に関する先行研究

池上（1983）は、「談話」あるいは「テキスト」を「テクスト」たらしめているものが「テ

クスト性」（texture）であると述べている。「テクスト性」を支える要因としては「結束性」（cohesion）「卓立性」（prominence）「全体的構造」（macrostructure）<sup>2</sup>を挙げることができるが、今回は、第一段階として「結束性」を分析対象とする。

結束性を構成する際に生じる問題を探った先行研究は齊藤（1993）、筒井（1995）、樋口（1996）等多数あるが、そのほとんどは結束性を構成する一形式である接続語句や指示詞など個別の形式のみを対象にしている。しかし、学習者が結束性を保つためにどのような手段を用いており、どの部分から問題が生じているのかを的確に捉えるためには結束性を構成する全形式を視野に入れて調査する必要がある。また、先行研究の多くは書かれた資料を対象にしており、発話における結束性を調査対象としたものはあまりない。

\*九州大学留学生センター助教授

そこで、大神（2004）では学習者の発話を対象に、結束性を保つ手段となる諸形式に焦点をあて、学習者および日本語母語話者（以下母語話者）が談話を構成する際どの程度の頻度で各形式を用いているのか、両者の相違を分析した。その結果、学習者の特徴として、接続語句と指示詞の脱落が多い点、同一語句の反復が多く、関連語句<sup>3</sup>の反復および近接の関係にある語彙・表現<sup>4</sup>の使用が十分ではない点が多くなった。

今回は同一語句の反復という視点から学習者の発話の「分かりにくさ」「話せなさ」の原因をさぐる。

## 2 - 2 語句の省略と反復に関する先行研究

反復表現および省略表現はともに談話の結束性を保つための手段である。前者は前文の内容が後文においても同形式で出現する場合を指し、後者は文法的に必要である要素が後文の表面に現れない場合を指す。両者とも前文の内容が後文に何らかの形式で持ち込まれ内容的に関連付けられている点で共通している。

学習者が日本語の省略を習得する際に生じる問題を探った先行研究は、平川（1989）、架谷（1991）、大塚（1995）などがあげられるが、主語や主題の視点から調査したものが殆どである。これらの先行研究では、主語や主題の省略の習得には、立場志向的表現、すなわち物事を述べる際の視点の統一を習得することが前提となることが明らかにされている（大塚 1995）。他に、話し手と談話の主題が同一である場合の主題の省略、つまり主題「私」の省略を習得した後に「私」以外の主題の省略の習得が進むことも報告されている（架谷 1991）。

しかし、学習者の発話における主語や主題以外の項目の省略表現について総合的に調査した

ものはあまりないようである。特に中国語母語話者を対象にしたものはあまりみあたらないようである。

次に同一語句の反復についてであるが、牧野（1983；1991）が反復表現を用いることについての効果を述べてはいるものの、学習者が反復表現を適切に用いているかやどのような要素を適切に反復することができないかについて調査したものは、自身で調べた限りあまりないようである。

以上、先行研究からの課題をまとめると次のようになる。主語・主題といった要素を特定するのではなく文中の要素を総合的に調査する必要がある。同一語句の反復という手段をどの程度適切に運用できるのか把握する必要がある、同一語句の反復を適切に行うことができない場合、文中のどのような要素をなぜ反復することができないのか探る必要がある。

## 2 - 3 調査事項

分析を進めるに先立って、久野（1978、1983）、益岡・田窪（1992）、寺村（1990）、架谷（1991）、大塚（1995）をもとに、同一語句の反復の規則を次のようにまとめた。

### 省略の規則

1. 一度話題になった要素は省略することができる。ただし、省略されるべき要素は言語的、あるいは非言語的文脈から復元可能でなければならない。
2. 主題の省略について
  - 1) 主題として提示された名詞は、その話題が続く限りいかなる文法的役割によって再び現れるとしても原則として省略することができる。
  - 2) 話題の中で主題として導入された名詞以外でも、導入されてから話の主題とな

る場合は省略することができる。

### 3. 主題以外の要素の省略について

- 1) 1の条件を満たし、かつその要素に焦点がおかれていない場合に省略することができる。
- 2) 特に、疑問文に対する答えの文では、述語のみを残して補足語等を省略することができる。

#### 同一語句の反復の規則

1. 一度話題になった要素は省略することを原則とする。ただし、次の条件下において反復することができる。

- 1) 主題を強調する場合、あるいは場面の転換が行われる場合に、主題は省略されずに反復されることが多い。
- 2) 主題以外の要素に焦点がおかれている場合、当該要素は反復されることが多い。尚、文中の要素の焦点化については、文法的に決定される場合と音声による強調ストレスにより決定される場合がある。

本調査では、同一語句の反復の規則に沿った反復を「規則内反復」、規則に反した反復を「規則外反復」と便宜上呼ぶことにする。

(例1)<sup>5</sup>

学習者1:

今年の正月は故郷へ帰ります。(A)

私の故郷は吉林省の通化市です。(B)

(例2)

学習者2:

8時から私達はテレビをみます。(C)

私達はとても楽しいです。(D)

例1の文Aで提示された「故郷」は文Bで主題となり話題が転換されている。この反復は「規則内反復」である。それに対し、例2では文Cで主題として提示された「私達」が同じ話題の文Dでも主題として再度現れている。これ

は「規則外反復」となる。

述部に来る動詞も省略することが可能であるが、ほとんどの場合、動詞は省略表現に文の資格を与えるため義務的に反復される。今回は述部の反復は分析の対象外とする。

本研究では、先行研究からの課題および反復の規則をもとに、次の調査項目を設定した。

学習者の発話ではどの要素がどの程度反復されているのか。母語話者との間にどのような相違があるか。

規則外反復および規則内反復は、どの要素にどの程度みられるのか。日本語母語話者との間にどのような相違がみられるか。

以上を明らかにした上で、同一語句の反復がどのように学習者の発話の「不自然さ」「分かりにくさ」に関わっているのか考察を進める。

分析の対象となる文の各成分については、益岡・田窪(1992)に倣い、補足語と補足語以外の成分に分類した。

#### 1. 補足語

主格    を格    に格    と格    で格  
へ格    が格<sup>6</sup>    から格    まで格

#### 2. その他の成分

名詞+の(以下の格)  
名詞+とりたて助詞<sup>7</sup>(以下「とりたて」)  
副詞<sup>8</sup>    接続詞    指示詞  
名詞修飾成分<sup>9</sup>    動詞修飾成分<sup>10</sup>

ところで、主題には、話題全体において主題となるもの(以下ディスコース・トピック)と、全体的な話題の中に埋め込まれた部分的な話題内で主題となるもの(以下サブ・トピック)がある。今回の調査は、話者が自分の冬休みについて話すというものであったので、ディスコース・トピックは「私」となる(以下「私」と記述する)。そして「私」以外の主題がサブ・トピックとなる(以下「他者」<sup>11</sup>と記述する)。こ

これらの主題はその主題についての話題が続く限り、どのような文法的役割で再び現れるとしても省略が可能になる。分析においては、ディスコース・トピックとサブ・トピックとして導入された名詞句が出現する成分については、「私」と「他者」、そして主題になっていない名詞句である「その他」に区別した。

(例3)

学習者3:

私の妻は料理を作ります。(E)

私は作りません。(F)

(例4)

学習者4:

私は旧暦の12月30日に掃除をします。(G)

あとで、テレビの番組を見ます。(H)

番組の内容はとても面白いです。(I)

例3の文Eに見られる「私」はディスコース・トピックであり、「妻」はサブ・トピックのである。文Fにみられる「私」はディスコース・トピックである。例4では、文Gにディスコース・トピックである「私」が提示されており、文Hでは「私」が省略されている。また、文Hで取り上げられた「番組」は文Eで反復されているが主題とはなっていないので「その他」に分類することになる。文Iのサブ・トピックは「内容」である。

### 3. 方法

中国国立東北師範大学内赴日本留学生予備学校で日本語を学習している学習者20名を対象とした。どの学習者もゼロ初級から日本語の学習を開始し、初級過程をほぼ終了している。母語話者については大学の英文学科あるいは国文学科の学部生11名を対象にした。

調査ではインタビュー - を行い、今年の正月に

何をする予定かについて尋ねた。母語話者にはインタビューが行われた時期の関係で今年の夏休みに何をする予定かを尋ねた。

分析の手順であるが、まず、学習者と母語話者の発話から同一語句の反復を取り出し、文中のどの成分が反復されているのかを集計した。その際、質問者の発話内で提示された語句を学習者が続けて反復した場合も同一語句の反復として扱った<sup>12</sup>。次に、反復の規則をもとに規則内反復箇所と規則外反復箇所にふりわけ分析した。

## 4. 結果と考察

### 4-1 同一語句の反復

第一に、学習者と母語話者が発話内でどの成分をどの程度反復しているのかについて調査した。

表1は両者の同一語句の反復の使用をまとめたものである。表内の数字は学習者全体および母語話者全体の反復回数の合計である。

まず母語話者であるが、とりたて助詞を付加した「とりたて」の反復が合計10回とその使用が認められる。それ以外の成分では「の格」、副詞、「を格」、指示詞、主格、「に格」、「で格」において使用がわずかにみられるのみである。ディスコース・トピックである「私」はどの格においても使用がみられない。同一語句の反復は「とりたて」に代表されるように話題を焦点化するために用いられる場合が多いと言える。

それに対し学習者の発話には多様な成分の反復が観察された。最も多く見られたのは主格の反復であり計58例の反復が観察された。次に反復が多く見られたのは「の格」(計27例)であり、「を格」(計24例)、「と格」(計14例)と続く。このうちディスコース・トピックである「私」が観察されたのは主格、「と格」、「の格」

表1 同一語句の反復

	文の成分		学習者		母語話者	
			各反復回数	計	各反復回数	計
補 足 語	主格	「私」	46	58	0	1
		「他者」	12		1	
	を格	「私」	0	24	0	2
		「他者」	0		0	
		「その他」	24		2	
	に格	「私」	0	3	0	1
		「他者」	0		0	
		「その他」	3		1	
	と格	「私」	8	14	0	0
		「他者」	0		0	
		「その他」	6		0	
	で格	「私」	0	2	1	1
		「他者」	0		0	
		「その他」	2		0	
	へ格		1	1	0	0
が格	「私」	0	4	0	0	
	「他者」	0		0		
	「その他」	4		0		
から格	「私」	0	2	0	0	
	「他者」	0		0		
	「その他」	2		0		
そ の 他	の格	「私」	13	27	0	5
		「他者」	1		5	
		「その他」	13		0	
	とりたて		7	7	10	10
	副詞		13	13	3	3
	接続詞		2	2	0	0
	指示詞		2	2	2	2
	名詞修飾成分		0	0	0	0
動詞修飾成分		0	0	0	0	
語彙の反復回数合計			159		25	
1人あたりの平均反復回数			7.6		2.3	

であった。

の3倍以上反復表現を用いていることになる。

1人あたりの平均反復回数は母語話者が2.3回、学習者が7.6回であり、学習者は母語話者

## 4 - 2 規則外反復

では、次に、規則外反復がどの成分にどの程度みられるのかをまとめる。表2は反復総数と規則外反復の回数を比較したものである。尚、表1において、学習者・母語話者ともに反復が観察されなかった成分（「を格」の「私」と「他者」、「と格」の「他者」、「名詞修飾成分」、「動詞修飾成分」と、反復回数の合計が少なく<sup>13</sup>分析するのが困難である成分（「に格」、「で格」、「へ格」、「が格」、「から格」、「の格」の「他者」、「接続詞」、「指示詞」）は表2以降は分析の対象外とする。

母語話者については今回は規則外反復は観察されなかった。観察された母語話者の発話における反復はすべて反復の規則に沿ったものであった。

それに対し、学習者の発話には規則外反復が多く観察された。最も多く見られたのは主格（計43例）であり、次に「を格」（計14例）、続いて「の格」（計12例）であった。ディスコース・トピック「私」の規則外反復は、主格にお

いて最も多く36例みられた。次いで「の格」において11例観察された。

では、次に学習者の反復表現に焦点をしばり、規則外反復と規則内反復について更に詳細に検討を進める。尚、学習者の発話において事例数が十分ではない「とりたて」は分析の対象外とする。

## 4 - 3 規則内反復と規則外反復

表3に、学習者の反復について、規則外反復の割合と規則内反復の割合をまとめた。

規則内反復が比較的適切にできているのは、「と格」の「その他」（100%）、「の格」の「その他」（92.3%）および副詞（61.5%）であった。

規則外反復表現の割合が最も多かったのは「の格」における「私」の反復（84.6%）であった。次に多かったのは主格の「私」（78.3%）であった。その次に主格の「他者」の規則外反復が66.7%見られた。更に「と格」における「私」（62.5%）、「を格」の「その他」（58.3%）

表2 規則外反復表現（反復表総数との比較）

	文 の 成 分		学 習 者				母 語 話 者			
			反復回数	計	規則外反復数	計	反復回数	計	規則外反復数	計
補 足 語	主 格	「私」	46	58	36	43	0	1	0	0
		「他者」	12		7		1		0	
語	を 格	「その他」	24	24	14	14	0	0	0	0
		と 格	「私」	8	14	5	5	0	0	0
「その他」	6		0	0						
そ の 他	の 格	「私」	13	26	11	12	0	5	0	0
		「その他」	13		1		5		0	
他	とりたて		7		0	0	10		0	0
	副 詞		13		5	5	3		0	0
規則外反復回数合計					88				0	
1人あたりの平均規則外反復回数					4.4				0	



表3 学習者の発話における規則外反復表現と規則内反復表現

文の成分			規則内反復	規則外反復	
補 足 語	主格	「私」	回数	10	36
			割合	21.7%	78.3%
	「他者」	回数	4	8	
		割合	33.3%	66.7%	
	を格	その他	回数	10	14
			割合	41.7%	58.3%
と格	「私」	回数	3	5	
		割合	37.5%	62.5%	
	「その他」	回数	6	0	
		割合	100.0%	0.0%	
そ の 他	「私」	回数	2	11	
		割合	15.4%	84.6%	
	その他	回数	12	1	
		割合	92.3%	7.7%	
副詞		回数	8	5	
		割合	61.5%	38.5%	

と続く。全体的に「私」の規則外反復が目立つ。

これらの中で、主格、「と格」、「の格」についてはディスコース・トピック「私」の規則外反復が多いことから、まず第一にディスコース・トピックの反復が規則外反復に関係していると言える。主格は加えてサブ・トピックも規則外反復に影響を与えていると言える。

「を格」にはディスコース・トピックの規則外反復もサブ・トピックの規則外反復も出現しなかったことから、主題以外の要因が規則外反復に影響を与えていると考えられる。

以下、問題点を ディスコース・トピックとサブ・トピック、「を格」(主題以外の要因)の2点に絞り、考察を進めることにする。また、この2点の規則外反復が学習者の発話の「分かりにくさ」「不自然さ」にどのように関わっているのか結束性という視点から考察する。

#### 4 - 4 考察

##### 4 - 4 - 1 ディスコース・トピックとサブ・トピック

架谷 (1991)、大塚 (1995) は、立場志向的表現、すなわち物事を述べる際の視点の統一を習得すると主題の省略が適切に行えるようになると報告している。また、主題「私」の省略を習得した後に「他者」の省略の習得が進むことも報告されている。

本調査でも、学習者の多くはまだ視点の統一の習得が進んでいないためにディスコース・トピック・サブ・トピックともに適切に省略することができず、結果として規則外反復が生じていると考えられる。

では、ディスコース・トピックおよびサブ・トピックの規則外反復は結束性という視点からみるとどのように問題となるのであろうか。

久野 (1978 p15) は、省略順序の制約について、「省略は、より古く重要度の低い情報を表す要素からより新しく重要な情報を表す要素へと順に行う」と述べている。ディスコース・トピック「私」は会話開始時から既知の情報となっており、いわば最も古く重要度の低い情報である。サブ・トピックも、部分的な話題の中では最も古く重要度の低い情報となる。

また、久野 (1978) および大塚 (1995) は、結束手段としての省略の機能を、冗長度を下げ、発話に高い経済性をもたせることであるとしている。反復が許容されるのは当該主題を強調する場合か場面の転換が行われるときのみである。

学習者の発話では、強調すべきでない情報や話題の転換が生じていない場合にも反復が生じるために文意が不明瞭になり、その結果聞き手が的確に文意を把握しづらくなるのではないかと。

また、談話主語の規則外反復は、話者と聞き手にとって自明の旧情報を反復することであり、

言うまでもなく冗長度を高めることになる。そのため学習者の発話がぐどく不自然に感じられるのであろう。

#### 4 - 4 - 2 を格

久野 (1978) は、主格以外の項目の省略は語順と情報の重要度や新旧の関連性によって決定されると述べている。また、日本語は文中の語順は古い情報から新しい情報を表す項目へと進むのを原則としており、多くの場合、動詞の直前にくる項目はより重要でより新しい情報を表すことになる。情報の新旧は語順だけでなく話者のイントネーションや疑問詞の有無、新情報を表す助詞「が」でマークされた名詞句の有無等様々な要因により決定されるため、「を格」の省略は複雑な過程を経なければならない。「を格」に規則外反復が多く観察されたのは、学習者がこの複雑な過程を十分に習得していないためであろう。

同じく主格以外の成分である「と格」の「その他」および「の格」の「その他」には「を格」とは反対に、規則内反復が多く見られたが、その理由は学習者が構成した談話の構造の特徴にあるのではないか。例5と例6をみてみよう。

#### (例5)

学習者5 :

(大晦日の昼母と掃除をしたあとで) 両親とおいしい食べ物を買います。(J)  
夜、両親と一緒にテレビをみながら、餃子を作るつもりです。(K)

#### (例6)

学習者6 :

今年の正月に、両親と一緒に祖母の家へ行きます。(L)

祖母の家は中国の南の方の江蘇です。(M)

文Jで提示された「両親と」は文Kでも反復されているが、文Kで話題の転換が生じている

ため、改めて焦点化された形になっている。また、文Lで提示された「祖母の(家)」は文Mにおいて主題化され話題が転換されているため、こちら規則内反復として許容される。今回の調査では「と格」の「その他」および「の格」の「その他」は、例5と例6のように話題の転換が早期に生じている談話内で現れることが多かった。

では、規則外反復の多かった「を格」の「その他」の例を見てみよう。

#### (例7)

質問者：チョウさんの家では誰が料理を作りますか。(N)

学習者4：私の妻が料理を作ります。(O)

質問者：チョウさんのお母さんもつくりますか。(P)

学習者4：以前、料理を作りました。(今は病気で作れません。)(Q)

例7では、「料理を作る」という「大きな話題」の中で「誰が作るか」という「小さな話題」の転換が生じている。しかし、文Nから文Qまでを通じて「料理を作る」という「大きな話題」は変わらないので「料理」は省略するのが自然である。

「と格」の「その他」および「の格」の「その他」は話題の転換が比較的早期に生じる「小さな話題」に属するものが多かったため規則内反復が多くなったものと考えられる。

それに対し、「を格」の「その他」は、先にあげた理由に加え、話題が長く続く「大きな話題」に属するものが多いため規則外反復が多くなったのではないか。

では、「を格」の規則外反復は結束性という視点からみるとどのように問題となるのであろうか。

主格以外の要素の反復が許容されるのはその

要素に焦点がおかれているときのみである。また、先にも述べたが、動詞の直前に来る要素は新しく、かつ焦点化された情報であることが多い。

再度例7を見てみよう。「を格」の殆どが動詞の直前に位置していることが分かる。学習者の発話は例7のように「を格」の殆どが述語の直前に位置していた。

動詞の直前に「を格」が残っていると、聞き手はまず焦点化されたより重要な情報であろうと解釈する。しかし実際は焦点化されていない旧情報であるため、聞き手の理解に混乱が生じるのではないか。更に、本来焦点化された情報が現れるはずの位置に焦点化されていない情報が残っているため、発話の焦点が不明瞭になると考えられる。そのため聞き手にとって学習者の発話が「分かりにくい」ものとなるのであろう。

今後会話のクラスを実践するにあたっては、まず第一に過剰の反復は不適切な情報を焦点化したり強調したりすることになるため不自然な印象をあたえる原因となることを意識させることが必要であろう。ただし一度導入された要素はいつも省略しなければならないわけではなく、省略してはいけないものもあるということに注意させなければならない。次に、主題の省略は言うまでもなく、「を格」等補足語成分の省略も重要であることを学習者に意識化させる必要があると言える。

## 5. 今後の課題

今後の課題としては、第一に、本調査で明らかになった結果をどのように会話の授業に還元していったらよいか、更に具体的な方法論を考察していきたい。

第二に、主格以外の要素の規則外反復について、更により多くのデータを集め問題点を明らかにしていきたい。

最後に、本稿の研究結果は学習者の発話が「分かりにくい」「不自然である」と言われる原因の一考察に過ぎない。更に多角的な視点から原因を探っていく必要がある。

## 参考文献

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育』(日本語教育指導参考書11) pp.7-42 国立国語研究所
- 大神智春 (2004) 研究発表「中国人日本語学習者の発話における結束性 - 効果的な会話授業に向けての基礎研究 -」平成15年度第12回日本語教育学会研究集会 (京都)
- 大塚純子 (1995) 「ディスコース・トピック省略と冗長さの減少について：中上級日本語学習者の場合」『國文』83 pp.22-33 お茶の水女子大学国語圏分学会
- 久野 章 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 久野 章 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 齊藤真理子 (1993) 『The Oral Proficiency Interview に表れた談話の分析 - 中級と上級の談話の型の違い』寺村秀夫編・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』談話楓社
- 筒井佐代 (1995) 「初級における談話レベルの作文教育」『言語探求の領域』pp.343 - 351 大学書林
- 架谷真知子(1991)「日本語の主語と目的語の省略 - 学習者の習得過程」『日本語学』1月号 65-74 明治書院
- 樋口祐子 (1996) 「初級後半からの作文指導のために」『日本語教育』91号 pp.132-143
- 平川八尋 (1989) 「主語省略の再生メカニズムにおける日本人と外国人日本語学習者の相違」『日本語と日本文学』第11号 pp.1-8 筑波大学国語国文学会
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 牧野成一 (1983) 「省略と復元」『講座日本語の表現 5 日本語のレトリック』pp.73-87 筑摩書房
- 牧野成一 (1991) 「省略の日英比較 - その引き込みの表現効果 -」『日本語学』1月号 pp.41-49 明治書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改定版 -』くろしお出版

## 注

- 1 本研究は、平成2004年度第2回日本語教育学会研

- 研究会での発表を加筆修正したものであり、平成2003年度科学研究費補助金奨励研究「中国人日本語学習者の発話における談話構成上の問題 - 会話授業開発のための基礎研究 -」(課題番号15902019)の成果の一部である。
- 2 「結束性」とは文と文の間の情報の連続性を示す仕組みである。「卓立性」とはある部分を際立たせて提示するための手段であり、「全体的構造」とは「テキスト全体にかぶせられる枠」のことである(池上1983)。
  - 3 関連語句とは「男の子」と「少年」を例とする類義語と、「果物」と「バナナ」を例とする上位語と下位語を指す。
  - 4 近接の関係にある語句とは、「鍵」と「かける」のように、両者の間に近接の関係があると認められる語句を指す。
  - 5 本稿で取り上げる例文はいずれも学習者が連続して発話した2文である。例文では、助詞や活用などの文法的誤りは筆者が訂正して提示している。また、( )内の内容は文意が分かりやすいよう筆者が補足

したものである。

- 6 「AはBが好きだ」に代表される二重の属性表現を表す「が」である。
- 7 「公園では」「友達とは」など、主格となっているもの以外を指す。
- 8 本稿では「明日」「3時に」など時を表す表現も含む。
- 9 連体詞と名詞を修飾する形容詞を指す。
- 10 形容詞の連用形および「繰り返し」のような動詞連用形を指す。
- 11 本稿では「他者」は「私」以外の人物および事柄や場所をさすものとする。
- 12 日本語において談話は、談話への参加者が相互に働きかける共同作業により成立することから(堀口1997)、質問者の発話した内容を学習者が繰り返した場合も反復とみなした。
- 13 今回は全体的に事例数が十分であったとは言えないが、各格の反復回数合計が2桁以上あるものを分析対象とした。

# アジアにおける大学連携のための基礎的研究

## 共同カリキュラム・プログラム開発に関わるフィージビリティ・スタディ(1)

岡崎 智己\*

### 1. はじめに

昨年11月に本学主催で開催された第5回アジア学長会議で「共同カリキュラムの開発に向けて」というセッションを設けるに当たり、会議に参加するアジアの諸大学を対象に共同カリキュラムについてのアンケート調査を実施した。その結果、以下の7大学において総計74の国際共同カリキュラム・教育プログラムがすでに実施されていることが分かった。<sup>1</sup>

- ・中国科学技術大学
- ・香港中文大学
- ・ハノイ農業大学
- ・シンガポール国立大学
- ・マヒドン大学
- ・チュラルンコン大学
- ・マラヤ大学

また、その後の調査でフィリピン大学やアテネオ・デ・マニラ大学でも同様の国際共同カリキュラム・教育プログラムが実施されていることが分かった。調査結果を概括すると、東アジア、及び東南アジアの高等教育機関で海外の諸大学と提携して共同カリキュラム・教育プログラムが積極的に行われていないのは、日本と韓国の大学だけであり<sup>2</sup>、その他の国々・地域では、国際交流、学術交流の一環として、また社会と学生のニーズに応える措置として、様々な

分野で共同カリキュラム・教育プログラムが企画・実施されていた。

### 2. プログラムの内容と実施形態

共同プログラムの内容としては学位や資格の取得に至る「学位・資格取得プログラム」と専攻する課程での単位の一部が取得できる「単位取得プログラム」の二種類がある。またプログラムの実施形態から便宜上分類すれば「供与型」と「乗り入れ型」の二つのタイプのあることが分かった。

「供与型」とは、典型的には、例えばA大学とB大学で共同プログラムを立ち上げたとして、一方のA大学が学生、教室、事務手続きの一切を提供し、もう一方のB大学が教師、教材、教案、成績評価の全てを請け負うといった形態のものである。こうしたタイプのプログラムには学位や資格の取得できるものが多く、それらの学位や資格は、通常、教育の実際を担当したB大学から授与される。このような教育実践面での一方向的な「供与型」のプログラムが実施される背景には、近年になっての社会人教育や生涯教育の増大・拡充に伴う高等教育に対する社会的な需要の急激な増大があり、それに既存の大学が対応しきれないでいること、またその一方で欧・米・豪を中心としたいわゆる先進国の

\*九州大学留学生センター教授

大学が展開する教育ビジネスのアジア市場開拓とが呼応しての帰結であると考えられる。

次に「乗り入れ型」であるが、これはA大学の学生が自学で専攻する学科の履修課程の一部を提携先であるB大学に赴いて単位を取得するというタイプのものである。相手先大学での履修期間は3週間程度といった短いものから半年(=1学期分)、或いは1年間、場合によっては2年間(=4学期分)に及ぶものまで長短様々である。また、課程を修了して与えられる学位も、自学からのみ授与されるもの、双方の大学から各々授与されるもの(=double degree)、或いは学位証は一枚であるが、そこに双方の大学の名前が併記されたものが授与される場合(=joint degree)と、これも一様ではない。なお、このタイプの共同カリキュラム・教育プログラムは大学間の学生交流協定に則り、相互に定められた数の学生を交換する(=留学させる)方式で行われるもの(=相互乗り入れタイプ)と、常にA大学からB大学へ一方的に学生を派遣する方式のもの(=一方的借入タイプ)の2タイプが見受けられた。

さて、本学が開発、実施を希望している共同カリキュラム・教育プログラムが、上記の分類で言えばどの型・タイプになるのかは現時点ではまだ明確になっていないが、今後の議論の参考とすべく、以下では香港中文大学での実践を例にとって「乗り入れタイプ」プログラムの実際について検証してみたい。

### 3. 香港中文大学での事例

香港中文大学では海外の大学と提携し、すでにいくつかの共同カリキュラム・教育プログラムが実施されているが、それらは主として工商管理学院(Faculty of Business Administra-

tion)が主管して行っているプログラムである。こうしたプログラムの中には中国本土の著名大学や研究機関とタイアップして行われているものもあるが、そうした場合、その殆どは「供与型」(=供与者は香港中文大学)である。「乗り入れタイプ」のプログラムとしてはヨーロッパや北米の大学と提携し行っている共同プログラム(しばしば‘Global’という形容詞を付けて呼ばれる)があり、ここではそれらを取り上げて紹介する。<sup>3</sup>

#### OneMBA Global Programme

これは管理職レベルでの業務経験を7年以上有する学部卒業者を対象とし、週末のみを利用して開講されるMBAプログラムで、2002年に開始された。資料によれば、これまでの受講生の平均年齢は37歳、男性78%、女性22%の構成比で、彼ら/彼女らの平均業務経験年数は11年とのことである。

当プログラムは毎年9月に始まり、期間は21ヶ月で、月一回ペースで週末を利用して講義やセミナーが行われる。管理職としてビジネスに携わる者の基礎を形成する内容の講義を5科目と世界的な規模・視野に立ってのビジネス業務関連の講義を5科目受講することが必須となっており、各科目とも3単位(36時間)が割り当てられている。

更に、こうした週末を利用しての香港中文大学での授業の他、初年度の9月、次年度の3月と11月、そして翌々年の5月に、それぞれ7~8日間の海外研修に参加しなければならない。研修先は以下の通りであるが、そこでは提携先の大学の学生とも一緒になって講義を受けたりセミナーに参加したりしながらその国・地域における産業やビジネスのあり方を学び、また実際に地元企業等を訪問する見学・研修ツアーも

催行される。各回の海外研修で与えられる単位は4.5単位（60時間相当）である。

- ・ Rotterdam School of Management (Netherlands)
- ・ Fudacao Detulio Vargas (Brazil)
- ・ The Univ. of North Carolina at Chapel Hill (USA)
- ・ EGADE-ITESM (Mexico)

このように21ヶ月で計48単位(600時間)分の授業科目を履修し、無事に全課程を修了するとMBAの学位が授与される。授業料が318,000香港ドル（＝約450万円）と高額であるが<sup>4</sup>、これまでの受講生の三分の二は全額もしくは授業料の一部を所属する企業が負担しているとのことで、まさにビジネス・エリートの養成に的を絞った社会人（＝企業人）向けの極めて特化されたプログラムとすることができる。

本プログラムのホームページ：<http://www.baf.cuhk.edu.hk/mba/onemba/index.html>

#### Global BBA programme

こちらはビジネスを専攻する学部学生を対象とした共同カリキュラム・教育プログラムで、香港中文大学、及び以下の2大学から各々15人を限度として選抜された学生（計45名）を対象に今年から開講されたプログラムである。

#### 参加・提携大学

- ・ Copenhagen Business School(Denmark)
- ・ The Univ. of North Carolina at Chapel Hill (USA)

香港とコペンハーゲンの学生は2年生の第1学期までを、ノースキャロライナの学生は3年生の第1学期までを各自が所属する（＝入学した）大学で過ごし<sup>5</sup>、各々の大学が提供する基礎教養科目、並びにビジネス関連科目と3大学がインターネットを利用して合同で提供する

国際ビジネスのコースを受講する。その後、参加学生45人全員がコペンハーゲンに集合して1学期間、次いで夏の期間を香港で、そして更に次の1学期間をノースキャロライナで共に過ごし、講義やセミナーを受講する。この間、ヨーロッパでは滞在するコペンハーゲンの大学での授業以外にロンドン、ブラッセル、ベルリンへの見学・研修ツアーが組まれ、同様にアジアでは香港での授業に加えて東京と上海へ、また北米ではノースキャロライナでの授業に加えてワシントン D.C.への見学・研修ツアーが催行される。こうしてヨーロッパ、アジア、北米の拠点大学を回りながら各々の国・地域におけるビジネスの実情を学び、国際的な規模で展開するビジネスに必要な素養と感覚を養っていくのである。そして最終学年の最終学期を母校に戻って過ごし、プログラムの総仕上げを行って全課程を修了する。

香港中文大学の学生の場合、卒業までに取得すべき単位は111～123単位で、授業の全てが原則「英語」で行われるため、高い英語力(TOEFL 600点以上)と優れた学業成績を有することが本プログラムへの参加の条件となっている。こうした厳しい参加基準は香港中文大学の学生にだけ当てはまるのではなく、他の2大学の学生についても同様である。コペンハーゲン・ビジネススクールでは1学年100名中、上位15%の学生のみが、またノースキャロライナ大学ではGPA（4点満点）の平均が3.5以上の学生から選ばれた15人の学生のみが受講を許可される規定とのことである。

学業面での高い水準を要求するこのプログラムは、また経済的にもそれなりの負担を強いるものとなっている。資料によれば香港中文大学の学生がヨーロッパと北米で過ごす期間に必要な経費は、往復の旅費や滞在費、見学旅行

費用を含めて凡そ20,000米ドル (= 約210万円) であり、卒業までに必要となる経費は、学費、寮費と生活費の全てを入れての計算で、香港だけで過ごす通常の場合より100,000香港ドル (= 約140万円) は高くなるという。<sup>6</sup> にもかかわらず、このプログラムは実施初年度から受講希望者が殺到し、予定されていた45名 (= 15名 × 3 大学) の定員は問題なく埋まったと聞いている。

本プログラムのホームページ：<http://www.cuhk.edu.hk/globe/eng/index.htm>

以上が香港中文大学で行われている共同カリキュラム・教育プログラムの概要である。いずれも工商管理学院が主管して行っているプログラムであるため、ともにビジネスの分野でのプログラムとなっているが、前者 (= OneMBA) は先に示したタイプ別分類で言うと「乗り入れ型」のうちの「一方的借入タイプ」で、後者 (= Global BBA) は「乗り入れ型」の「相互乗り入れタイプ」に当たるものと言ってよいかと思う。

#### 4. 「共同」の意義と意味

ここでは通常そう呼ばれるところの共同カリキュラム・教育プログラムの「共同」の意義と意味について、改めて考えてみたい。

まず、何が「共同」であるのか。本稿第二章で触れたように共同カリキュラム・教育プログラムとは呼ばれていても、実態としては「供与型」に分類される内容のものはプログラムの内容 (= 教育) ではなく、プログラムの運営 (= 経営) が国・地域を越えて「協同」で行われる類のものであった。そこではプログラムの運営 (= 経営) に関わるが故に双方の大学の名前が併記されることはあっても、教育の実践におい

ては、学生はおろか教員においてすら、プログラムに關与する大学間で相互に交流の行われることはまずない。

筆者自身は、こうしたプログラムを共同カリキュラム・教育プログラムと呼ぶことには躊躇を感じる。何故なら教育実践における国際的「共同」作業が共同カリキュラム・教育プログラムの最大の魅力であり、必須の要素であると考えるからである。ここで言う教育実践面での「共同」作業は、プログラムに参加する学生からすれば、国・地域を越えての「協働」学習が実現される機会を提供してくれるメカニズムそのものである。そして恐らく、それは学生にとってばかりではなく、プログラムに關与する教員にとっても同様で、相手先大学の教員と共同でカリキュラムを策定し、プログラムを共同で立ち上げ、運営する作業を通して、彼我の様々な違いを認識し、理解し、学び、新たな知識とする「協働」学習が実践されるものと思われる。このことを逆から言えば、目指す教育プログラムの内容、及び教育・学習効果が一国・一地域・一大学内で完結され得るものであるなら、何も余計な負担を強いる“越境”をしてまで「共同」カリキュラムを開発する必要はないということになる。

上で述べたことは、更には国際的な共同カリキュラム・教育プログラムのあり方自体を暗示しているように思われる。それを一言で言うなら、共同カリキュラム・教育プログラムが「共同」であるためには、参画する全てのメンバーが得るもののある「win + win」の状況でなければならないということである。特定の大学や特定の学生グループだけが得をしたり、特定の大学やその構成メンバーにのみ負担を強いるような状況では、長期にわたってのプログラムの運営は円滑、円満には運ばない。自分の大学



だけでは足りない要素があるからこそ、それを提供してくれるパートナーを求めるわけであるが、その際、相手に対してもこちらから提供できる何かがあれば共同カリキュラム・教育プログラムは立ちゆかないということに注意を喚起しておきたい。苦労もあるが、互いに得るものがある、故に「協働」作業を続けていけるのである。

さて、「供与型」ではなく「乗り入れ型」であっても「一方的借入タイプ」の場合は「協働」学習がなされるかという視点からすると、やはり物足りなさを感じずにはいられない。例えば OneMBA Global Programme の場合、香港中文大学の学生が訪問先大学に滞在している間は現地の学生・教師との交流も行われるという。そこでは「協働」学習が実現される部分もあるのかもしれないが、しかし「協働」学習が実現されたとしても、それはあくまでもプログラム (= 教育) 全体から見れば限られた一時的なものでしかなく、果たして旅先での一場の交流以上の成果が得られたと言えるかどうか、筆者には疑問が残る。

では、本来の意味での共同カリキュラム・教育プログラムとはどんな内容 (= 教育実践) を有するものであるのか。筆者の考えるところでは「乗り入れ型」の中の「相互乗り入れタイプ」、香港中文大学の場合で言えば Global BBA programme がその良い例を示しているように思う。このプログラムでは参画する大学各々が持つ地域特性を活かして受講者に体験・学習・実践の場を相互に提供しており、プログラムに参加する各大学の学生は一年間の長期に渡って一緒になって共通の課題に挑戦し、議論を深めていくことで問題解決の方法論を学ぶ。即ち言語、文化、社会・教育環境の異なる国・地域から参集した学生が、互いに刺激し合いながら切

磋琢磨し、相互に働きかけ、学び合う国際的「協働」学習が実現できている (少なくともそうした機会がふんだんに設けられている) のである。1 + 1 = 2 以上、という国際「共同」カリキュラム・教育プログラムならではの長所と醍醐味がここに実現されていると思うのだが、どうであろうか。

ところで、このような「協働」学習が実現されるためには、カリキュラムを策定し、教育プログラムを運営する上で必須となる、いくつかの構成要素がある。その第一に挙げられるのは学習者中心の考え方であり、次いでグループアクティビティや実習 (= ハンズ・オン・アクティビティ) 等を取り入れた実践的課題解決型の授業の展開ということになる。これは日本の大学、特に人文・社会科学系の講義で主流(?) となっている学生へ一方的に知識が提示され、「理解できないもの、ついて来られないものは去れ」式の授業では「協働」学習は実現されないということでもある。そもそも共同カリキュラム・教育プログラムは、香港中文大学の例に見るように、大変にコストと労力のかかるものである。よって、入り口部分 (= 受講者の選抜) である程度の足切りはするとしても、一度プログラムに受け入れた以上は極力落伍者を出さない工夫が必要とされる。言語 (母語)、文化、社会・教育環境の異なる学生を同時に相手にするのであるから、尚更ことは簡単ではない。国際「共同」カリキュラム・教育プログラムの難しさはまさにそこにあるわけだが、そうした多様性とダイナミズムがあるからこそ得るものも大きいことはすでに述べた通りである。そして循環論的に、まさにそうであるが故に学習者中心の基本姿勢を崩すわけにはいかないのである。

これに関連して、教師の役割についても一言言っておきたい。背景を異にする多様な学生の

混在するクラスで「協働」学習を実現させるには、教師と学生、また学生相互の間で、活発に議論が行われ、互いが持ち合わせていない何かを互いに補い、学び合えるよう、教師は常に注意を払い、日になり陰になりクラスの「協働」作業を牽引する役割を負わなければならない。学習者中心と言うとき、学習者が学びの中心であるために教師の果たすべき役割は決して小さくないのである。

## 5. 教学の質保証

一国・一地域・一大学の枠を越え、共同カリキュラム・教育プログラムを立ち上げるに当たっては相互に「win + win」の条件が整うことが必須であることはすでに指摘した。また立ち上がった共同カリキュラム・教育プログラムにおいて「協働」学習が実現されるにはどのような構成要素が必要となるかについても考察した。ここでは、そうした共同カリキュラム・教育プログラムの実施に関する必要条件に加えて、それら必要条件を支える十分条件とも言える問題、即ち教学の質保証について、再び香港中文大学の実践を例にとって考えてみたい。

香港中文大学では3年ほど前に、それまでであった Teaching Development Unit (TDU) を発展的に改組して Centre for Learning Enhancement and Research (CLEAR) を立ち上げた。CLEAR の使命 (= Mission) と設立の目的 (= Goals) は以下の通りである。

### Mission

- To support the mission of the University particularly in its concern for the assurance of high quality in teaching and learning;
- To establish a supportive environment of

excellence in teaching and learning so as to maximise the potential of both teachers and students;

- To create opportunities for academics to reflect upon their teaching and sharing of their experiences.

### Goals

- To help academic staff adopt teaching techniques that facilitate active student learning, problem-based learning and evidence-based learning;
- To improve the quality of student learning and develop their independent, life-long learning skills;
- To provide feedback to teaching staff and their administrative heads to help identify modifications that could further enhance the quality of learning;
- To conduct research in active learning and evidence-based learning methods and measure the results of students' learning;
- To survey alumni and employers of CUHK graduates for purposes of furthering CUHK's understanding of how it can improve teaching of CUHK's students;
- To promote good teaching and learning practices by organizing various experience sharing sessions and collaboration opportunities with local and world-wide educational institutions/organizations.

このような教学 (= 教師側の活動と学生側の活動) の質的向上を目的とするセンターは、当初 E U の打ち出したヨーロッパ内の学術・学生交流の活性化政策に応じてイギリスを始めヨー

ロップアの大学に設置され、次いでオーストラリアの大学でも措置されるようになり、その後、香港においても設置され始め、今では香港にある全ての大学にこうしたセンターが設けられているとのことである。いずれのセンターもその使命と目的は大同小異であるが、使命・目的を遂行するに当たっての方法論や実践方法には自ずと違いがあるようである。香港中文大学の場合、3年前の改組時に新たな専任スタッフをオーストラリアから迎え、現在は総員14名（専任教授3名とリサーチ・スタッフ6名+事務・技術系スタッフ5名）という恵まれた体制で活動を展開している。以下に CLEAR での取り組みの実際を挙げる。

#### 教師向けセミナー

初めて教壇に立つ新人教師や他の大学から赴任して来て香港中文大学で教えることになった新参教師を主たる対象に、年二回、オリエンテーション研修を開催する他、年間を通して随時、効果的な教授法や成績評価の方法等についての自己啓発/職業研修セミナーを企画・実施している。これらのセミナーには新人教師や経験のまだ浅い教師に加え、ベテラン教師の参加も推奨・歓迎されている。主立ったセミナーの内容は以下の通りである。

- ・ 授業計画の組み立て方
- ・ 大人数クラスを教える場合の注意点
- ・ 小人数クラスを教える場合の注意点
- ・ 学生評価の実施方法とフィードバックの得方
- ・ グループ・プロジェクトの効用
- ・ 各種成績評価法の長所と短所
- ・ セミナーやチュートリアルで学生の議論を活性化させるテクニック
- ・ 授業における IT の効果的活用法
- ・ 役に立つラボ実験指南書の書き方

#### 大学院生向けセミナー

大学院課程で学ぶに当たって必要となる各種の学術スキルを教授するセミナーを新年度開始時に企画・開催している。また TA（ティーチング・アシスタント）となって教育にも関わることになる大学院生に向けた TA 研修セミナーも企画・開催している<sup>7</sup>。この種のセミナーの主な内容は以下の通りである。

- ・ ラボ実験を行うに当たっての安全基準のあり方
- ・ 研究資料の検索・収集方法
- ・ IT 活用術
- ・ 研究発表の仕方
- ・ 学術研究論文の書き方
- ・ 「知的財産権」「著作権保護」等についての注意事項

#### 関連資料の蓄積・整理と有益情報の公開

CLEAR のホームページを通じて、上記セミナーに関連する各種資料がダウンロードできるようにしてある他、有効・有益な教授法や教師の自己開発に関する書籍・情報の紹介、また香港の他大学に設けられている同様のセンターのホームページと各センターが協力して合同で立ち上げているウェブ・サイト Teaching Effectively in Higher Education in Hong Kong (TEHE) へのリンクが張られている。特にこの TEHE のウェブ・サイト (<http://teaching.polyu.edu.hk/>) は高等教育に携わるものには有益な情報が数多く集められていて、新人教師ならずとも授業の仕方で行き詰ったり、自分のクラスを少しでも良くしたいと考えている教師には役立つものとなっている。

### アンケート調査(学生評価)とフォローアップ・プロジェクトの企画・実施

CLEARの活動の中心をなすもので、授業科目別評価 (course review と呼ばれ3年毎に実施) と学部学科課程別評価 (programme review と呼ばれ6年毎に実施) を毎年、対象学部(複数)を順に変えて行っている。各評価を行うのは在籍する学部生で、CLEARは学生から返送される質問用紙、あるいはインターネットを利用して回答を収集・分析し、その結果を各学部・学科の長に伝える。その際、単に調査結果の報告を書面で伝えるだけではなく、学部長・学科長と直接会合を持ち、調査結果から明らかとなった種々の点について話し合い、各学部の教育における更なる改善に向けての検討とフォローアップ・プロジェクトの提案を行っている。以下に調査項目の具体例を示す。いずれも学生の視点から評価基準が設定されていることに注目されたい。

Critical thinking: Through this programme I have developed my ability to make judgments about alternative perspectives.

Self-managed learning: I feel that I can take responsibility for my own learning.

Interpersonal skills and groupwork: I have learnt to become an effective team or group member.

Active learning: Our teaching staff uses a variety of teaching methods.

Feedback to assist learning: There is sufficient feedback on activities and assignments to ensure that we learn from the work we do.

Coherence of curriculum: I can see how courses fitted together to make a coherent

programme of study for my major.

CLEARの方法論・活動実践が目指すところは、より効果的・能動的な教育・学習環境を学生に提供することである。そのために大学教育の中核を担う各学部とそこに所属する教師・TAに対して、教授法の改善やより良いクラス運営についての各種プロジェクトを企画・実施するのである。その際、こうした取り組みに対する全学的な理解とサポートが必要となることは言うまでもない。また、そうした全学的な理解とサポートを得るためにはCLEARの方法論・活動実践が実際に香港中文大学での教育・学習環境の改善に有益・有効であることが常に証明されなければならないため、そうした具体的な効果 (= 学生評価におけるポイントの向上) が現れることを目指して常々活動を展開しているとCLEARの専任教授の一人が熱意を込めて語っていたことが印象的であった。

最後にCLEARのURLを挙げておく。

<http://translate.itsc.cuhk.edu.hk:8080/gb/www.cuhk.edu.hk/clear/index.htm>

## 6. 本学における共同カリキュラム・プログラムの開発に当たって

ここではこれまで見てきた香港中文大学での実践例を参考に、本学で国際的な共同カリキュラム・教育プログラムを立ち上げるとすれば、どのような準備が必要となるかについて考察してみたい。

まず、どの分野・専攻であれば本学と相手校の間で「win + win」の状況が実現できるかを検討しなければならない。本学の国際化の柱の一つである「アジア重視」を反映し、アジア域内の大学と共同カリキュラム・教育プログラ

ムを開発するのであれば、改めて本学が掲げるアジア重視の意義・意味を問う必要も出てこよう。もっとも「アジア重視」であるが故にアジアに限定して相手校を選定したりプログラムを開発したりしなければならないということにはならない。欧米の大学をも取り込む形で本学の「アジア重視」の姿勢を共同カリキュラム・教育プログラムの中に実現させるということも十分に考えられるからである。いずれにしても、本学の教員が学内、あるいは国内に限定された環境では、担当する学科・専攻において学生を十分に満足・納得させる学習環境や教育・トレーニングを与えられないと強く感じる事が最初の一步である。そうした必要が感じられないのであれば、第三者がいくら叱咤激励したところでいかなる共同カリキュラム・教育プログラムの開発にも至らないであろう。筆者は必要性の自覚を共同カリキュラム・教育プログラム開発への最初の一步として挙げたい。

さて、その第一歩が踏み出せた場合、次に必要となるものは何かと言えば、それは間違いなく英語力である。これは国際的な共同カリキュラム・教育プログラムを導入する際、教師と学生の双方に必要な能力・スキルである。そのためには本学における既存の英語プログラムの改善と充実が強く求められる。英語で書かれた文献資料を（時間をかけて）読んで理解することができる程度では、海外の教師・学生との「共同」作業はもちろんのこと「協働」作業は行えない。「協働」学習を実現するためには英語による情報発信、意見表明が遅滞なく行えることが確実に必要であり、そうした作業が行えるだけの基礎体力＝英語力がなければ共同カリキュラム・教育プログラムの実施は望むべくもない。<sup>8</sup>

ところで、英語で授業を行う／授業を受ける

ということは、これまで日本語で行っていた同様の作業を単に英語に「翻訳」して行うということでは決してない。学生にすれば講義ノートの取り方、小論文の書き方、発表の仕方、ディベートの仕方等々を英語で行うに当たっての種々の様式と技能を新たに学ぶ必要があるし、教師にとっても授業プランの立て方、各回の授業（討論等の活動を含む）の展開の仕方、課題の出し方、評価の仕方、フィードバックの取り方とそれへの対応を英語で行うためのノウハウとスキルを一から習得しなければならない。ところが本学には、こうしたスキルやノウハウについて段階を追って順に習得できるような仕組みもなければ、それらを伝授してくれる専門家も今のところ配置されていない。本学が国際的な共同カリキュラム・教育プログラムの開発を望むのであれば、イギリスやオーストラリア、また香港の大学に設けられた CLEAR のような機能を持ったセンターの設置を真剣に考えるべきであろう。

更に香港中文大学では全学の教学レベルを向上させるために CLEAR は ELTU (English Language Teaching Unit) に加え、ITSC (Information Technology Service Center) とも協力し合って各種の啓発セミナーや研修プログラムを教員と学生の双方に提供していた。このことは今や大学教育の質的レベルを保証するには英語力のみならず、IT リテラシーが一定の水準に達していることが必要であるということを示している。昨今、北米を中心に熱心に議論がされ始めている Scholarship of Learning & Teaching においても WBT (Web Based Training) を始めとする IT 技術の活用が教育における学生ケアの重要な部分を占めている。有益な知識・情報と双方向でのコミュニケーションが時間や場所に限定されることなく

提供できる IT 技術は、これからの教育には必要不可欠と考えられているのであり、ましてや一国・一地域・一大学の枠を超えて企画・実施される国際的な共同カリキュラム・教育プログラムにあっては IT 技術の活用はまさに必須と言えよう。本学においても、その基盤整備が急がれることは言うまでもない。

以上、本学において共同カリキュラム・教育プログラムを開発するに当たり必要となる最初の三步、即ちホップ (= 必要性の自覚)、ステップ (= 実践的英語力の育成)、ジャンプ (= IT リテラシーの養成) について述べた。また、これらが各々ばらばらに自覚され、整備されるのではなく、それらを有機的に結びつけ、九州大学における「教育の質保証」を推進するために新たなセンターを設置することの必要性についても言及した。そうした全学的な体制を整えることができるかどうか、本学のアジアに軸足を置いた「国際化」を推進し、ひいては今後の国際的な共同カリキュラム・教育プログラムの開発・実施に繋がるであろうことを再度指摘して本稿を終えることとする。

注：本調査・研究は九州大学教育研究プログラム・拠点形成プロジェクト (B-1タイプ：アジア総合研究) の助成を受けて行われているものである。

#### 参考資料

*An Integrated Framework for Curriculum Develop-*

*ment and Review*, The Chinese University of Hong Kong, 2004

*From Diagnostic Feedback to University Policy: Programme-level Evaluation at a Hong Kong University*, McNaught, C. The Chinese University of Hong Kong, 2005

#### 注

1. 詳しくは以下のサイトを参照のこと：  
<http://asia.kyushu-u.ac.jp/jointcourses2004.pdf>
2. その後、文部科学省から得た資料により、日本においても海外の大学と提携して共同学位制度を導入している (あるいは導入しようとしている) 大学が20校以上あることを知った。
3. 工商管理学院 (Faculty of Business Administration) について詳しく知りたい場合は下記のサイトを参照のこと。<http://www.baf.cuhk.edu.hk/mba/onemba/index2.html>
4. 海外研修に関わる渡航費や滞在費は別途必要となる。
5. 香港とデンマークでは学士課程は3年制であるが、北米では4年制であるため。
6. 余分にかかる経費の合計が海外で過ごす期間の費用のそれを下回るのは、海外で過ごす期間の費用にその間の授業料相当分も含まれているためである。
7. 香港中文大学では各科目とも教師による講義に加え、TAによるチュートリアルが毎週行われることが一般的な授業形態となっている。
8. 実は香港中文大学においても教師・学生の英語力について様々な問題が生じており、CLEARは人文学部附属する English Language Teaching Unit (ELTU) と連携して、教師・学生の英語力の向上にも目配りを行っている。

## 日本語補講コース (JLC)

小 山 悟\*

### 1. コースの概要

#### (1) 基本方針とコース編成

JLC (Japanese Language Course) は1996年4月に、当時「全学補講」として開講されていた日本語コースに、短期留学プログラム (JTW) の学生を対象とした日本語コースを統合する形で開設された。このコースは「総合デパート方式」から「専門店街方式」への転換を基本方針のひとつとしており、従来の「文法や語彙はもちろん漢字も会話も全てひとつのクラスで賄う」という総合コース方式を捨て、「漢字・語彙」、「会話」という2つの技能別コースを増設することによって、各コースがそれぞれの到達目標を明確に打ち出すようにしたという点に特徴がある。これにより、学習者も各自のニーズやスケジュールに合わせてコースを選択、受講できるようになった<sup>1</sup>。例えば、日本語研修コースでの予備教育を終えた学生が、引き続き研究の合間を縫って日本語の勉強をしたいと考えた場合、漢字・語彙のコースだけを週2日受講することもできれば、中級の総合コースで読みのスキルを鍛えながら、会話のクラスで話す練習をすることもできるといった具合である。

表1 JLCのコース編成

レベ ル	総合コース	技能別コース	
		漢字・語彙	会 話
入 門	G-1 (4)		
初 級 1	G-2 (4)		
初 級 2	G-3 (4)	W-3 (2)	
中級入門	G-4 (4)	W-4 (2)	O-4 (2)
中 級 1	G-5 (2)	W-5 (2)	O-5 (2)
中 級 2	G-6 (2)	W-6 (2)	O-6 (2)
上級入門	G-7 (2)	W-7 (2)	O-7 (2)
上 級	G-8 (2)		

( ) 内は1週間の授業回数

#### (2) 各コースの授業内容

各コースを「専門店化」という方針の下、総合コースも初級レベル (G-1~G-4) では「基本文法の理解と運用」を、中級以降 (G-5~G-8) では「読解力の養成」を到達目標の中心に据えるこ

\*九州大学留学生センター助教授

とにした。もちろん、これは「初級では会話の練習を一切行わない」ということではなく、新たな文法や語彙を学習した後、それを使った会話の練習はするが、十分な時間はかけられないので、本格的な会話の練習は会話コースの方で行うということである。

2004年度に各コースで使用した教材・テキストは表2のとおりである。

表2 各クラスの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
G1	『Total Japanese』	W-3	『Basic Kanji Book vol.1』
G-2		W-4	
G-3		W-5	『Basic Kanji Book vol.2』
G-4	『J. Bridge』	W-6	『Intermediate Kanji Book vol.1』
G-5	『日本語中級 J301』	W-7	『Intermediate Kanji Book vol.2』
G-6	『読解演習はじめての専門書』	会話	使用教材
G-7	『大学生と留学生のための論文ワークブック』	O-4	自主作成教材を使用
	『大学・大学院留学生のための日本語1 読解編』	O-5	
G-8	自主作成教材を使用	O-6	
		O-7	

### (3) 開講スケジュール

開設当初は前・後期のセメスター制を採用していたが、(1) 来日の遅れた学生は次の学期が始まるまで半年近く待たなければならない、(2) 1月～2月は大学院の入試のため日本語の学習に集中できないなどの理由から、2003年度以降、各学期5週間の5学期制を導入している。(2004年度の開講スケジュールは表3のとおり)。

表3 JLCの開講スケジュール

学 期	開 講 期 間
第1学期	4月12日(月) ～ 5月20日(木)
第2学期	5月27日(木) ～ 6月30日(水)
第3学期	10月12日(火) ～ 11月15日(月)
第4学期	11月24日(水) ～ 12月24日(金)
第5学期	1月14日(金) ～ 2月18日(金)

### (4) プレースメント

プレースメントは2日に分けて行っている。初日は受講希望者全員が受験しなければならない総合テストで、2日目が技能別クラスを受講を希望する学生だけを対象とした漢字・語彙テスト(60分)、及びインタビューテスト(1人10分程度)である。総合テストは、(1)初級クラスのテキストに準拠させた文法テスト(35分)、(2)日本語能力試験2級レベルの聴解テスト(30分)、(3)日本語能力試験



1級レベルの読解テスト(30分)の3つからなり、試験の結果をもとに各受講者のレベル判定を行っている。判定の手順は以下のとおりである。

- (1) まず、文法テストで70%以上取った受講者を「初級修了者」、69%以下の者を「初級者」と大きく二つのグループに分ける。
- (2) 「初級者」を文法テストの成績をもとにG-2~G-4の3つのレベルに振り分ける(G-1はゼロ初級者なので試験は受けていない)。
- (3) 「初級修了者」を読解テストの成績をもとにG-5~G-8の4つのレベルに振り分ける。
- (4) 最後に、聴解テストの成績を見ながら、読み書きの能力と聞き話しの能力に極端な差があると思われる受講希望者を抽出し、微調整を行う。

セメスター制だった時には、JLCを初めて受講する学生も、前学期から継続受講する学生も全員毎回プレースメント・テストを受験しなければならないことになっていたが、5学期制を導入してからは(1)前2学期からの継続受講者で、(2)前2学期の成績が「A」または「B」だった場合には、自動的に次のレベルに上がれることとした<sup>2</sup>。これにより教員側の作業負担は大幅に減少したが、その分システムが複雑になり、学習者の誤解と混乱を招きやすくなったことも事実である。そこで、以前は留学生課の事務局を通して行っていたプレースメントの申し込みを、教員との面談方式に変え、学生に直接「どのテストを受けなければならないのか」を説明するようにした。こういった個別対応は一見非常に手間のかかる原始的な作業のように思われるが、受付期間をプレースメント前日の午後1時から5時まで限定したことや<sup>3</sup>、必要なテストを受けずに、全てが終了してから「再度試験を実施してほしい」と頼まれることがなくなったことなどを考えれば、むしろ効率的とも言えるものであった。

## 2. 受講者数の推移

JLCはこれまで一時的に受講者を減らすことはあっても、長期的に見れば着実に受講者を増やしている。コース開設初年度(1996年度)の受講者は前期が155名、後期が168名であったが、2004年度には前期が220名、後期が273名と、当初の1.4~1.6倍にまで増えている。また、各クラスの受講者数を合計した延べ受講者数<sup>4</sup>でも1996年度の前期221名、後期238名に対し、2004年度は1.3~1.4倍の前期290名、後期351名となっている。九大の留学生数そのものもここ数年およそ800名から1,000名に増えているが、JLC受講者の増加率はそれを上回っている。

増加率以外で注目すべき点は、受講者数と延べ受講者数の差が小さくなってきていることである。この差が小さいということは、2つ以上のコースを同時に受講している学生が少ないということの意味するのだが、1996年春に受講者数(155名)の1.43倍だった延べ受講者数(221名)は、2004年後期には1.29倍にまで下がっている。その理由としては、年々各クラスの授業内容が充実し、授業の予習と復習にかかる負荷が増えたことや、受講者がある程度優先度を決めて的確にコースを選択できるようになったなどの理由が考えられるが、残念ながらその根拠となる具体的なデータはない。

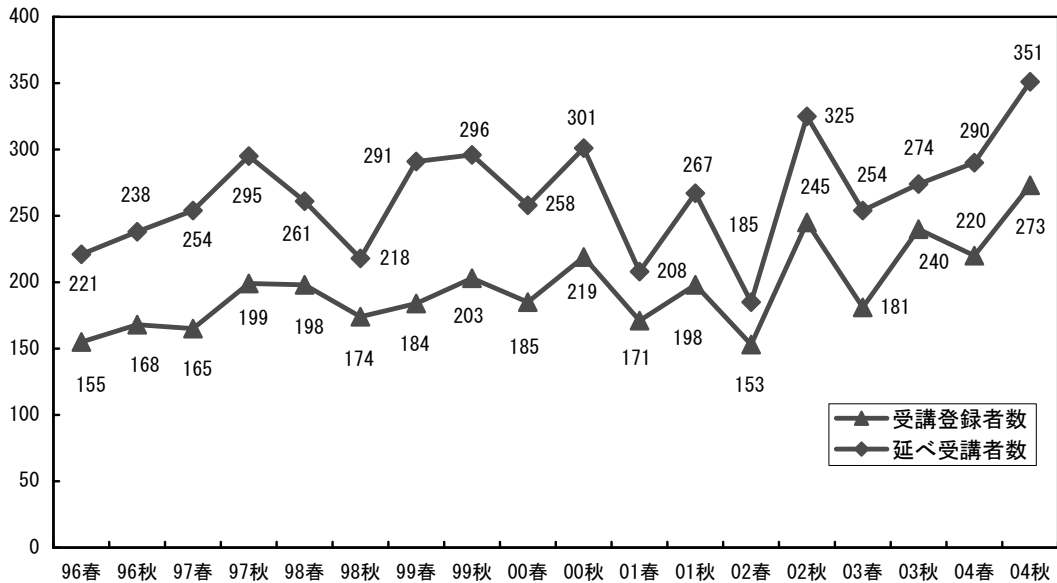


図1 JLC 受講者数の推移

### 3. 受講者の内訳<sup>5</sup>

#### (1) 所属

JLC 受講者の内訳を4年前のデータと比較してみると、「所属別」では工学府、農学府、留学生センター、法学府の4部局が上位を占めるという点には変わりはないが、受講者の増加という点から見てみると、留学生センターの受講者数が大幅に増えていることがわかる。これは日韓共同理工学部留学生予備教育コースや日本語・日本文化研修コース（JLCC）といった留学生センター所属のコースが新たに開設されたことによるものである。

#### (2) 身分

身分別では、大学院生でも研究生でもない「その他」の学生の受講者が増えてきている点が特徴的である。この中には留学生センターで実施している日韓共同理工学部留学生予備教育コースや日本語・日本文化研修コース（JLCC）、法学部で実施しているYLPやCSPAといった短期留学コースの学生が含まれており、これらのコースが新規開講したことが原因と考えられる。

#### (3) 受講暦

受講暦の点では、前期は継続受講者が多く、後期は新規受講者が多いという傾向が続いている。これは留学生センターや法学部で開講されている短期留学コースがいずれも10月開講であることが原因と考えられる。

#### (4) 出身地域

中国・台湾出身者がもっとも多く、韓国出身者が2番目に多いという状況が長く続いていたが、こ

ここ数年それ以外のアジア諸国出身者の数が急激に増えてきている。中でも、ベトナム、タイ、ミャンマーといった東南アジア諸国で、これは全学的な傾向である。出身国別では現在も中国と韓国の出身者が多数を占めている。

表4 受講者の内訳 (所属別)

	00年前期		00年後期		04年前期		04年後期	
工学	32	17.4%	41	18.7%	36	16.4%	40	14.7%
農学	28	15.2%	38	17.4%	30	13.6%	45	16.5%
留学生センター	24	13.0%	25	11.4%	36	16.4%	54	19.8%
法学	22	12.0%	27	12.3%	30	13.6%	36	13.2%
人間環境	18	9.8%	16	7.3%	21	9.5%	26	9.5%
システム情報	12	6.5%	12	5.5%	14	6.4%	13	4.8%
医学	9	4.9%	14	6.4%	11	5.0%	13	4.8%
理学	8	4.3%	7	3.2%	7	3.2%	8	2.9%
経済	6	3.3%	7	3.2%	3	1.4%	6	2.2%
数理学	5	2.7%	5	2.3%	3	1.4%	3	1.1%
比較社会文化	4	2.2%	10	4.6%	8	3.6%	8	2.9%
総合理工	4	2.2%	5	2.3%	2	0.9%	5	1.8%
歯学	4	2.2%	5	2.3%	1	0.5%	2	0.7%
薬学	4	2.2%	1	0.5%	4	1.8%	2	0.7%
人文科学	3	1.6%	3	1.4%	8	3.6%	5	1.8%
芸術工学					5	2.3%	7	2.6%
不明・その他	1	0.5%	3	1.4%	1	0.5%	0	0.0%
	184	100.0%	219	100.0%	220	100.0%	273	100.0%

表5 受講者の内訳 (身分別)

	00年前期		00年後期		04年前期		04年後期	
研究生	41	22.2%	78	35.6%	70	31.8%	84	30.8%
大学院生	74	40.0%	85	38.8%	47	21.4%	63	23.1%
教官・訪問研究員	17	9.2%	13	5.9%	26	11.8%	23	8.4%
その他	48	25.9%	39	17.8%	73	33.2%	96	35.2%
不明	5	2.7%	4	1.8%	4	1.8%	7	2.6%
	185	100.0%	219	100.0%	220	100.0%	273	100.0%

表6 受講者の内訳 (受講歴別)

	00年前期		00年後期		04年前期		04年後期	
新規受講者	75	40.5%	137	62.6%	74	33.6%	176	64.5%
継続受講者	102	55.1%	75	34.2%	145	65.9%	84	30.8%
復帰受講者	8	4.3%	7	3.2%	1	0.5%	13	4.8%
	185	100.0%	219	100.0%	220	100.0%	273	100.0%

表 7 受講者の内訳 (出身地域別)

	00年前期		00年後期		04年前期		04年後期	
中国・台湾	69	37.3%	86	39.3%	85	38.6%	95	34.8%
韓国	31	16.8%	39	17.8%	41	18.6%	47	17.2%
他アジア	30	16.2%	39	17.8%	41	18.6%	72	26.4%
ヨーロッパ	27	14.6%	26	11.9%	20	9.1%	27	9.9%
北米	16	8.6%	14	6.4%	14	6.4%	13	4.8%
その他	12	6.5%	15	6.8%	19	8.6%	19	7.0%
	185	100.0%	219	100.0%	220	100.0%	273	100.0%

### 3. 受講者による授業評価

JLC では発足当初から受講者による授業評価を実施してきたが、これまでは個々の教師が授業改善の資料として活用するというだけであった。しかし、2004年度からはこれをコース毎に集計し、その結果を JLC の FD とも言える「日本語教育方法検討会」(年 2 回開催)に報告、非常勤講師の方々と共にコース全体の改善と見直しという観点から討議を重ねている。以下、評価結果に対するコメントは省略し、結果のみを提示する。

#### 3.1 授業内容について

##### (1) 授業の難易度

質問：この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

- a. とてもやさしかった      b. やさしかった      c. どちらとも言えない  
d. むずかしかった      e. とてもむずかしかった

		a(易)	b	c	d	e(難)
初 級	前期	0.0%	13.3%	68.0%	12.0%	6.7%
	後期	0.9%	15.0%	58.9%	24.3%	0.9%
中上級	前期	0.0%	16.3%	76.7%	0.0%	7.0%
	後期	0.0%	10.8%	62.2%	24.3%	2.7%
漢 字	前期	5.4%	19.6%	58.9%	3.6%	12.5%
	後期	0.0%	19.0%	63.5%	11.1%	6.3%
会 話	前期	0.0%	13.2%	76.3%	2.6%	7.9%
	後期	0.0%	31.6%	52.6%	15.8%	0.0%

##### (2) 宿題の量

宿題の量は適当でしたか。

- a. 少なかった      b. もう少しあったほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し多かった      e. たいへん多かった

		a (少)	b	c	d	e (多)
初 級	前期	0.0%	1.3%	59.2%	38.2%	1.3%
	後期	0.0%	7.5%	67.0%	22.6%	2.8%
中上級	前期	0.0%	2.3%	83.7%	11.6%	2.3%
	後期	0.0%	10.8%	67.6%	21.6%	0.0%
漢 字	前期	0.0%	7.1%	62.5%	25.0%	5.4%
	後期	0.0%	4.7%	60.9%	28.1%	6.3%
会 話	前期	2.6%	28.9%	65.8%	2.6%	0.0%
	後期	0.0%	15.8%	78.9%	5.3%	0.0%

## (3) 授業の回数

1週間の授業回数は適当でしたか。

- a. 少なかった      b. もう少しあったほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し多かった      e. たいへん多かった

		a (少)	b	c	d	e (多)
初 級	前期	1.3%	6.6%	81.6%	10.5%	0.0%
	後期	5.5%	19.3%	60.6%	13.8%	0.9%
中上級	前期	2.3%	20.9%	72.1%	4.7%	0.0%
	後期	5.3%	13.2%	81.6%	0.0%	0.0%
漢 字	前期	1.8%	12.5%	82.1%	3.6%	0.0%
	後期	1.6%	17.5%	77.8%	3.2%	0.0%
会 話	前期	7.9%	21.1%	71.1%	0.0%	0.0%
	後期	10.5%	15.8%	68.4%	5.3%	0.0%

注. 2004年後期は受講者数が当初の予想を超えて多かったため、通常週4回の初級コースを週3回で開講した。

## (4) 開講期間

5週間のクラスは適当でしたか。

- a. 短かった      b. もう少しあったほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し長かった      e. たいへん多かった

		a (短)	b	c	d	e (長)
初 級	前期	7.9%	31.6%	52.6%	6.6%	1.3%
	後期	5.7%	31.1%	59.4%	3.8%	0.0%
中上級	前期	9.3%	34.9%	55.8%	0.0%	0.0%
	後期	13.5%	24.3%	62.2%	0.0%	0.0%
漢 字	前期	8.9%	35.7%	55.4%	0.0%	0.0%
	後期	4.8%	28.6%	63.5%	3.2%	0.0%
会 話	前期	10.5%	52.6%	34.2%	2.6%	0.0%
	後期	0.0%	31.6%	68.4%	0.0%	0.0%

## (5) 授業の進度

授業のスピードは適当でしたか。

- a. 遅かった      b. もう少し速いほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し速かった      e. たいへん速かった

		a(遅)	b	c	d	e(速)
初 級	前期	0.0%	6.7%	72.0%	18.7%	2.7%
	後期	0.0%	19.3%	65.1%	13.8%	1.8%
中上級	前期	0.0%	7.0%	72.1%	16.3%	4.7%
	後期	0.0%	8.1%	75.7%	16.2%	0.0%
漢 字	前期	1.8%	8.9%	73.2%	16.1%	0.0%
	後期	3.2%	7.9%	66.7%	22.2%	0.0%
会 話	前期	0.0%	18.4%	81.6%	0.0%	0.0%
	後期	0.0%	10.5%	89.5%	0.0%	0.0%

## (6) 一クラスあたりの学生数

クラスの大きさ(学生の数)は適当でしたか。

- a. 小さい      b. もう少し大きいほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し大きかった      e. たいへん大きかった

		a(少)	b	c	d	e(多)
初 級	前期	1.4%	6.8%	63.5%	25.7%	2.7%
	後期	1.0%	8.8%	61.8%	25.5%	2.9%
中上級	前期	0.0%	4.7%	83.7%	11.6%	0.0%
	後期	2.7%	10.8%	83.8%	2.7%	0.0%
漢 字	前期	0.0%	5.6%	61.1%	31.5%	1.9%
	後期	0.0%	1.6%	51.6%	40.3%	6.5%
会 話	前期	0.0%	7.9%	65.8%	26.3%	0.0%
	後期	0.0%	10.5%	89.5%	0.0%	0.0%

参考資料：各クラスの受講者数

前期(第1学期開講時点)

初 級		中上級		漢 字		会 話	
G-1a	12名	G-5a	9名	W-4	9名	O-4a	4名
G-2a	18名	G-5b	8名	W-5	11名	O-4b	4名
G-2b	16名	G-6	11名	W-6	12名	O-4c	10名
G-3a	15名	G-7a	7名	W-7	18名	O-5	8名
G-3b	11名	G-7b	13名			O-6	11名
G-4a	14名	G-8	4名			O-7	10名
G-4b	9名						
平均	13.6名	平均	8.7名	平均	12.5名	平均	7.8名

## 後期 (第3学期開講時点)

初 級		中上級		漢 字		会 話	
G-1a	14名	G-5a	9名	W-4	7名	O-4a	12名
G-1b	9名	G-5b	10名	W-5	21名	O-4b	7名
G-1c	7名	G-6	20名	W-6	14名	O-5	7名
G-2a	16名	G-7a	12名	W-7	23名	O-6	5名
G-2b	18名	G-7b	5名			O-7	10名
G-3a	13名	G-8	開講せず				
G-3b	17名						
G-3c	13名						
G-4a	11名						
G-4b	13名						
平均	13.1名	平均	11.2名	平均	16.3名	平均	8.2名

## 3.2 学習者の自己評価

[表の見方] 「予習」と「復習」にかける時間については平均時間。授業への取り組みに関しては数値が高いほど意欲的。最大値は4.0で、3.0以上が一応の目安。

## (1) 予習にかける時間

授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。毎回平均\_\_\_\_\_時間ぐらい

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	1.65時間	1.29時間	1.92時間	1.17時間
後期	1.80時間	1.34時間	1.80時間	1.02時間

## (2) 復習にかける時間

授業の復習するのにかかった時間はどれくらいでしたか。毎回平均\_\_\_\_\_時間ぐらい

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	1.52時間	1.05時間	1.35時間	1.09時間
後期	1.49時間	0.87時間	1.19時間	1.03時間

## (3) 授業への取り組み方

この授業に自分として意欲的に取り組んだと思いますか。

- a. 強くそう思う(4)      b. そう思う(3)      c. どちらとも言えない(2)  
d. そう思わない(1)      e. 全くそう思わない(0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	2.93	2.69	2.96	2.84
後期	2.93	2.67	2.78	2.83

## 3.3 教師に対する評価

[表の見方] 数値が高いほど高評価。最大値は4.0で、3.0以上が一応の目安。

## (1) 授業時間の厳守

授業は時間どおり行われましたか。

- a. 強くそう思う(4)    b. そう思う(3)    c. どちらとも言えない(2)  
d. そう思わない(1)    e. 全くそう思わない(0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	3.30	3.43	3.26	3.51
後期	3.36	3.25	3.40	3.67

## (2) 教育への熱意

教師に授業への熱意が感じられましたか。

- a. 強くそう思う(4)    b. そう思う(3)    c. どちらとも言えない(2)  
d. そう思わない(1)    e. 全くそう思わない(0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	3.52	3.50	3.55	3.57
後期	3.74	3.56	3.70	3.78

## (3) 授業の準備

(教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

- a. 強くそう思う(4)    b. そう思う(3)    c. どちらとも言えない(2)  
d. そう思わない(1)    e. 全くそう思わない(0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	3.57	3.46	3.57	3.59
後期	3.76	3.39	3.57	3.78

## (4) 説明のわかりやすさ

先生の教え方はどうでしたか。

- a. とてもわかりやすかった(4)    b. わかりやすかった(3)    c. まあまあ(2)  
d. 少しわかりにくかった(1)    e. わかりにくかった(0)

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	3.14	3.07	3.25	3.19
後期	3.28	3.17	3.22	3.22



## 3.4 総合評価

[表の見方] 数値が高いほど高評価。最大値は100%で、80%以上が一応の目安。

## (1) 満足度

あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 \_\_\_\_\_ %

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	85.5%	83.2%	87.7%	81.3%
後期	86.8%	82.4%	86.4%	86.7%

## (2) 達成度

このコースであなたは何を一番練習したかったですか。それはどのくらい達成できたと思いますか。  
\_\_\_\_\_ %

	初 級	中上級	漢 字	会 話
前期	76.5%	72.7%	78.5%	72.0%
後期	68.9%	72.0%	75.6%	77.2%

## 注

- 岡崎智己 (1997) 「日本語コース運営の新しい試み・九大留学生のための日本語コース (JLC) 発足にあたって」『九州大学留学生センター紀要』第8号を参照。
- ただし、スキップを希望する場合や受講するコースを変更する場合には、必要なテストを受けなければならない。
- 授業などでこの時間にどうしても来られない学生に関しては、プレースメント当日の朝、受付を行っている。
- 一人の学生が複数のコースを受講することができるシステムのため、各クラスの受講者数を合計した延べ受講者数は受講者数よりも3割程度多くなるのが通常である。
- データは全て受講者の自己申告に基づいたものである。

九州大学留学生センター Kyushu University International Student Centre

日本語コースに関するアンケート Students Evaluation of Japanese Language Courses

あなたのクラス \_\_\_\_\_

- I have taken this course during
- a. round 2 only
  - b. round 1 and round 2

A. 授業の内容について Regarding the course content

1. このコースでよく練習できたことは何でしたか。

What did you learn the most about in this course?

2. もっと練習したかったことは何でしたか。

What did you want to practice more?

3. この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

How difficult was the course overall?

- a. とてもやさしかった very easy
- b. やさしかった easy
- c. どちらとも言えない neither easy nor difficult
- d. むずかしかった difficult
- e. とてもむずかしかった very difficult

コメント : comments:

4. 宿題の量は適当でしたか。

Was the amount of homework given in the course appropriate?

- a. 少なかった too little
- b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
- c. ちょうどよかった enough

- d. 少し多かった a bit too much
- e. たいへん多かった far too much

コメント：

5. 1週間の授業回数（2回）は適当でしたか。

Was the frequency of the class (2 times per week) appropriate?

- a. 少なかった too little
- b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
- c. ちょうどよかった enough
- d. 少し多かった a bit too much
- e. たいへん多かった far too much

6. 5週間のクラスは適当でしたか。

Was the length of the class (5 weeks) appropriate?

- a. 少なかった too short
- b. もう少しあったほうがよかった needed to be a bit longer
- c. ちょうどよかった long enough
- d. 少し多かった a bit too long
- e. たいへん多かった far too long

7. 授業のスピードは適当でしたか。

Was the speed of the class appropriate?

- a. 遅かった too slow
- b. もう少し速いほうがよかった needed to be a bit faster
- c. ちょうどよかった enough
- d. 少し速かった a bit too fast
- e. たいへん速かった far too fast

8. クラスの大きさ（学生の数）は適当でしたか。

- a. 小さい too small
- b. もう少し大きいほうがよかった needed to be a bit larger
- c. ちょうどよかった large enough
- d. 少し大きかった a bit too large
- e. たいへん大きかった far too large

妥当な人数は ( ) 人ぐらい

The ideal class size would have been about ( ) students.

**B. 自分自身について Regarding your personal participation**

1. 授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。

How long did it take to prepare for each lesson?

毎回平均 時間ぐらい On average about hour(s) per lesson

2. 授業の復習するのにかかった時間はどれくらいでしたか。

How long did it take to review each lesson?

毎回平均 時間ぐらい On average about hour(s) per lesson

3. この授業に自分として意欲的に取り組んだと思いますか。

Do you think that you became actively involved in this course

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

**C. 先生について Regarding the instructor**

1. 授業は時間どおり行われましたか。

Was class conducted in a timely fashion?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

2. 教師に授業への熱意が感じられましたか。

Did you feel that the instructor had enthusiasm for the course?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

## 3. (教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

Was the instructor adequately prepared for class?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

## 4. 先生の教え方はどうでしたか。

How was the instruction?

- a. とてもわかりやすかった very easy to understand
- b. わかりやすかった easy to understand
- c. まあまあ average
- d. 少しわかりにくかった difficult to understand
- e. わかりにくかった very difficult to understand

## D. 総合評価 Overall evaluation

## 1. あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。

How satisfied were you with this course?

\_\_\_\_\_ %

コメント Comments (このコースは具体的にどんなところがよかったですか

What in particular was good about the course?)

## 2. このコースであなたは何を一番練習したかったですか。

What did you want to practice most in this course?

## 3. それはくらい達成できたと思いますか。

To what extent do you think that you achieved those goals?

\_\_\_\_\_ %

## 4. その他意見があれば自由に書いて下さい。

Additional comments:

# 日本語研修コース実践報告

因 京 子\*

## 1 コースの目的と概要

日本語研修コースは、大学の学部卒業以上の学歴を有し大学院で専門教育を受ける予定の研究留学生に対して予備教育を行なうものである。受講者の殆どは日本語受講歴がない。活動の中心は初級からの日本語教育にあるが、異文化への適応、特に日本の専門教育の現場への適応を促進するための教室外活動や日本事情教育を含む。具体的には、以下のような方針で運営した。1) 言語面では専門教育・研究への参加を支える日本語力への到達の可能性を保障するために、簡単な会話の運用力とともに構造的理解の基礎を進める。2) 文化面では、研究者としてのアイデンティティを保って他と交流するという現在及び将来の接触の質に鑑みて、大学を中心とする研究の場において円満な人間関係を構築するための知識と技能を提示する。3) 学習方法の面では学習速度や必要性に応じて自分の目標を学習者が自主的に設定するための手がかりを提供する。

## 2 実施概要

1) 実施期間 前期 4月8日 - 9月10日

後期 10月7日 - 3月11日

2) 標準的週間活動 (前後期共通)

	月	火	水	木	金
1時限 8:40 - 10:10	定期試験 (隔週)復習	導入・練習	基礎練習	導入・練習	基礎練習
2時限 10:30 - 12:00	読解・作文	導入・練習	応用練習	導入・練習	応用練習
3時限 1:00 - 2:30	読解・作文	C A I 漢字	応用会話	漢字 C A I	基礎会話 聴解

3) 学期活動

前期

開講式 4月8日 (木) 11:00 ~

キャンパスツアー 4月9日 (金) 10:20 ~

(指導部門: 高松)

健康管理についての講義 4月13日 (火) 10:30 ~

\*九州大学留学生センター助教授

(健康科学センター：上園)	
健康診断 (馬出キャンパス)	4月23日 (金) 1:00~
課外活動 防災センターと市立総合図書館	5月20日 (木) 1:00~
日本の大学についての講義	5月8日 (火) 2:50~
(指導部門：森山)	
研究室訪問	6月9日 (水)
課外活動 香陵小学校との交流会	6月28日 (月) 9:00~
発表会	7月30日 (金) 9:00~
日本の大学院入学へのガイダンス	9月6日 (月) 10:30~
(指導部門：白土)	
日本人学生との会話	9月7日 (火) 1:00~
(指導部門：高松)	
課外活動 唐津城&名護屋城博物館見学	9月8日 (月) 9:00~
閉講式&パーティー	9月10日 (金) 11:30~
後期	
開講式	10月7日 (木) 11:00~
キャンパスツアー	10月8日 (金) 午後
(指導部門：高松)	
健康管理についての講義	10月12日 (火) 10:30~
(健康科学センター：上園)	
健康診断 (馬出キャンパス)	10月27日 (水) 午後
課外活動 自動車工場と平尾台見学	11月4日 (木)
日本の大学についての講義	12月15日 (水) 2:50~
(指導部門：森山)	
研究室訪問	12月16日 (木)
課外活動 書道体験	12月17日 (金)
課外活動 防災センターと市立総合図書館	1月19日 (水) 1:00~
課外活動 香陵小学校との交流会	2月1日 (火)
研究室訪問	2月9日 (水) 一日中
発表会	2月24日 (木) 9:00~
日本の大学院入学へのガイダンス	3月8日 (火) 2:30
(指導部門：白土)	
日本人学生との会話	3月8日 (火) 1:00~
(指導部門：高松)	
課外活動 熊本城見学	3月9日 (水) 9:00~
閉講式&パーティー	3月11日 (金) 11:30~

### 3 受講者

前期 24名（文科省から配置された者20名と学内募集に応じた者4名、女性は8名）  
全員初級であった。

出身：ミャンマー、ブラジル、モンゴル、メキシコ、フィリピン、タイ、ベトナム、イラン、  
バングラデシュ、ジンバブエ、マレーシア、インドネシア、コスタリカ、パナマ、アル  
バニア、韓国

後期 20名（文科省配置15名、学内応募5名、女性は4名）

後期は、中級2名を含む。中級者は、JL C及び他学部の講義等を受講。

出身：エクアドル、マレーシア、インドネシア、フィリピン、イラン、スリランカ、バングラ  
デシュ、ミャンマー、アメリカ合衆国、ハンガリー、ペルー、エチオピア、中国、韓国

### 4 担当者

日本語、課外活動など

因 京子（専任、コーディネータ）

青木冬見、永守彰子、福間康子、松崎定子、和田玉己（非常勤）

増田恭子（専任、前期のみ）

オリエンテーション、日本事情など

森山日出夫、白土 悟、高松 里

#### 2004前期

	月	火	水	木	金
1時限	青 木	A：福間 B：因	A：永守 B：福間	A：因 B：増田	A：松崎 B：青木
2時限	A：青木 B：松崎	A：福間 B：因	A：永守 B：福間	A：因 B：増田	A：永守 B：青木
3時限	A：青木 B：松崎	A：松崎 B：福間	A：福間 B：永守	A：和田 B：増田	A：永守 B：青木

#### 2004後期

	月	火	水	木	金
1時限	青 木	A：福間 B：因	A：永守 B：青木	A：因 B：福間	A：松崎 B：永守
2時限	A：青木 B：松崎	A：福間 B：因	A：永守 B：青木	A：因 B：福間	A：松崎 B：永守
3時限	A：青木 B：松崎	A：松崎 B：福間	A：青木 B：永守	A：福間 B：和田	A：永守 B：青木



#### 4 使用教材

使用した教材の主なものをあげる：

- 因京子・池田伸子 (2003) 『研究留学生の日本語』 (ピーエフエスアール)  
 会話・ドリル・タスク上、会話ドリル・タスク下、各課解説、発展情報  
 因京子・金宥景・山路奈保子・ジラジランチャイアンカナー (2004)  
 『研究留学生の日本語 基礎練習問題集』 (九州大学留学生センター)  
 因京子・ジラジランチャイアンカナー・山路奈保子 (2004)  
 『研究留学生の日本語 応用練習問題集』 (九州大学留学生センター)  
 因京子・山路奈保子・福間康子 (2004)  
 『研究留学生の日本語 定期試験問題週』 (九州大学留学生センター)  
 因京子・上垣康与 (2000) 『日本語初級読解』 (アルク)  
 因京子他 (1992) 『読む練習』 (九州大学留学生センター)

#### 5 結 果

##### 1) 成績の認定

研修コース受講者の成績は下のような項目についての得点を総合して判定を行った。

60点以上を「合格」と予備査定し、センター委員会の承認を得て認定した。

平常点	構造練習	定期試験	小テスト	最終試験	最終発表	総 計
20	20	20	10	15	15	100

但し：

平常点 出席とクラス参加の積極性

構造練習 教科書の各課に付随する文法構造に関する必須課題の完成度

定期試験 7回行った読解試験と聴解試験及び2度の面接試験の結果

小テスト かな・漢字・語彙・聴解の小テストの結果

最終試験 読解試験と聴解試験と面接試験の結果

最終発表 公開発表会における口頭発表の完成度 (内容は文集「世界の輪」に収録)

##### 2) 成績と修了判定

前期

総合成績 A A 12名 A 8名 B 3名 C 1名

判定：初級24名 全員合格

後期

初級総合成績 A A 7名 A 8名 B 2名 C 1名

中級総合成績 A A 1名 A 1名

判定：初級18名、中級2名 全員合格

## 3) 学習者アンケートの結果

前期 実施日：2004年7月30日 回答者：24名

## A. カリキュラムとクラス活動

- A 1 : 総合的満足度 大変満足・満足：24 普通：0 不満足：0  
 A 2 : 進行速度 速すぎる：3 遅すぎる：0  
 速いが（又は遅いが）許容できる：20 回答なし：1  
 A 3 : バランス 大変よい・よい：19 普通：3 悪い：0 無回答：1  
 A 4 : 各活動の評価

活動	よ い	ふつう	わるい
文法	22	2	0
会話	19	5	0
漢字	22	2	0
発音	22	2	0
読む	21	3	0
書く	21	3	0
CAI	18	6	0

- A 5 : 予習の課題 役に立つ：23 役に立たない：0 無回答：1  
 A 6 : 復習の課題 役に立つ：24 役に立たない：0 無回答：0  
 A 7 : 漢字クイズ 役に立つ：24 役に立たない：0 無回答：0

## B. 教師

- B 1 : 教師とのコミュニケーション 十分：22 普通：2 不足：0 無回答：0  
 ・熱心に聴いてくれた。  
 ・面白い。  
 B 2 : 教師の技術 大変よい・よい：22 普通：1 悪い：0 無回答：1  
 ・経験を積んだ教師たちである。  
 ・母親のようだった。  
 ・ちゃんと忍耐強く聞くべきだと感じたことがある。  
 B 3 : その他  
 ・英語で話してほしいと思ったが、そうしないのがいいかもしれない。

## C. クラス

- C 1 : クラスの雰囲気 大変よい・よい：24 普通：0 悪い：0 無回答：0  
 C 2 : クラスメイトとの関係 大変よい・よい：24 普通：0 悪い：0 無回答：0  
 ・大きい家族のようになった。  
 C 3 : その他  
 ・クラスの友達が今後の支えになると思う。



・もっとゆっくりだったらよく理解できたと思う。

A 3 : バランス 大変よい・よい : 14 普通 : 3 悪い : 0 無回答 : 1

A 4 : 各活動の評価

活動	よ い	ふつう	わるい
文法	15	2	0
会話	11	5	1
漢字	16	1	0
発音	15	2	0
読む	14	4	0
書く	12	5	0
CAI	14	3	0

A 5 : 予習課題 役に立つ : 17 普通 : 0 役に立たない : 0 無回答 : 1

A 6 : 復習課題 役に立つ : 17 普通 : 0 役に立たない : 1 無回答 : 1

A 7 : 漢字クイズ 役に立つ : 17 普通 : 0 役に立たない : 1 無回答 : 0

・漢字クイズはもっと難しくしなければならない。

B . 教師

B 1 : 教師とのコミュニケーション 十分 : 16 普通 : 0 不足 : 0 無回答 : 1

・とてもよく教えていただきました。

・はじめの一ヶ月は英語を話してほしい。

・私は英語も日本語もわからなかったので、はじめのうち難しかった。

B 2 : 教える技術 大変よい・よい : 16 普通 : 1 悪い : 0 無回答 : 1

・素晴らしい・感謝している。親切。やさしい。みんなヒーローです。

・文法のわからない点を日本語で説明してもらってもわからない。

・はじめは、英語で話してほしい。

B 3 : その他

・他の人はみんなそうしないほうがいいと言うのだが、私は一語一語訳してほしい。

・C先生の話は社会科の教師である私には役に立つ情報がいろいろあった。

・先生たちは非常に理解があり忍耐力がある。よく訓練されている。

・はじめのうちは、質問には英語で対応してほしい。

・教師の役割はとても大きい。このコースの先生はすばらしかった。

C . クラス

C 1 : クラスの雰囲気 大変よい・よい : 17 普通 : 1 悪い : 0 無回答 : 0

C 2 : クラスメイトとの関係

大変よい・よい : 17 普通 : 0 悪い : 0 無回答 : 1

・お互いに非常に愛情を持ち合っていた。

・たのしかった。



- E 4 : 最終発表                    15 - 0 - 0 - 0        3  
     ・ ちょっと退屈だった (ほかの人のスピーチがよくわからないから)
- E 5 : キャンパスツアー        13 - 1 - 0 - 0        4
- E 6 : 健康指導                    14 - 0 - 0 - 0        4  
     ・ 健康診断の結果を教えてください。

#### 自由記述

- ・ 5ヶ月でこんなになるとは信じられない。
- ・ 遠足が楽しかった。
- ・ もっと歌を教えてください。

## 6 成果報告の方法

各受講生の成績は配置される学府の指導教員にセンター長名で送付した。報告した事項は、各項目の成績と総合成績 (数値)、判定結果 (A A, A, B, C, 不合格)、及び、日本語学習状況 (記述)、生活適応状況 (記述) である。

#### 参考

『世界の輪30号』前期の受講生の最終発表の概要をまとめた文集。

『世界の輪31号』後期の受講生の最終発表の概要をまとめた文集。

「初級からのアカデミック・ジャパニーズ - 『研究留学生の日本語』の試み - 」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ(2)平成14 - 16年度科学研究費補助金基盤研究費 (A)(1) 課題番号14208022研究成果報告書』 pp.93-109 (研修コースの教育方針と実践について論じた。)

## 全学教育科目の日本語

清水百合\*

### はじめに

全学教育科目の日本語は、留学生センターの日本語教育部門が担当している。平成15（2003）年の芸術工科大学との統合により、「日本語」の担当コマ数が6コマ増えて、従来の11コマから17コマになったことから、それまでの様々な不都合を解消する科目内容を考え、平成16（2004）年度から新しい時間割りを始めることができた。

### 1. 平成16年度以前の「日本語」

平成15年度までは、留学生センター担当の11コマを前期に6コマ、後期に5コマと入学後の第一学期に新入留学生が大学での受講に必要な日本語をなるべく早く身につけられるようにとの配慮がなされていた。

以下に平成15年度の講義題目を示す。

#### 前期

1. 「名作マンガで学ぶ日本語」
2. 「映画・テレビドラマを利用して学ぶ対話法」
3. 「アニメーションを利用した日本語の聴解」
4. 「読解・文章表現・口頭発表」
5. 「日本語の漢字音の運用練習」
6. 「本を1冊読もう」

#### 後期

1. 「マンガで学ぶ日本語と日本社会」
2. 「読解・文章表現・口頭発表」
3. 「自己表現のための日本語」
4. 「論文の書き方」
5. 「読解」

しかしながら、これらの11コマは学生が取りやすい時間割りに入れ込まれているとは言いがたかった。

---

\*九州大学留学生センター教授

まず学生の側からみれば、上記のような多様な内容を自由に選べることはなく、むしろ自分がいける時間のものを好むと好まざるにかかわらず取らなければならないというジレンマがあった。教員側は「学生は自分の選びたいものを選んで」と考えてなるべくバラエティに富んだ内容にしたことが裏目に出ていた。

またどのクラスもいつ取ってもよいので、ある者は1年生で、またある者は2年生で受講することがあり、1年生と2年生が混在するクラスは、そのレベルの差から指導が難しかった。

学生は「日本語」を選択した場合、学部によって以下のような履修規程がある。

#### 第一外国語として履修する場合

文学部・教育学部・法学部・経済学部	1年	1学期	3単位	2学期	2単位	
	2年	1学期	2単位			計7単位
理学部・薬学部・工学部・農学部	1年	1学期	2単位	2学期	2単位	
	2年	1学期	2単位			計6単位

#### 第二外国語として履修する場合

文学部・教育学部・法学部・経済学部	1年	1学期	2単位	2学期	2単位	
	2年	1学期	1単位			計5単位
理学部・医学部・歯学部・薬学部・工学部・農学部	1年	1学期	2単位	2学期	2単位	
						計4単位

そんな時に平成15年度に芸術工科大学との統合により、全学教育の日本語は従来の11コマに芸術工科大学分の6コマが加わり、17コマとなった。そこで平成15年度に改編を行い、平成16年度からは1年生と2年生に別のクラスを提供できるようにした。

## 2. 改編された学習内容（平成16年度）と今後の課題

以下が新しい時間割りとその学習内容である。

前期						
1年生対象						
1	月	1限	総合基礎	法学部	理学部	薬学部
2		2限	総合基礎	工学部	芸術学部	
3	火	1限	総合基礎	文学部	教育学部	医学部 歯学部
4		2限	総合基礎	経済学部	経工学部	工学部 農学部
5	木	2限	聴 解	法学部	理学部	薬学部
6		3限	聴 解	工学部	芸術学部	
7	金	3限	聴 解	文学部	教育学部	医学部 歯学部
8		4限	聴 解	経済学部	経工学部	工学部 農学部
2年生対象						
9	月	3限	社会文化	文学部	教育学部	法学部 理学部 工学部
10	水	2限	社会科学	文学部	教育学部	法学部 経済学部 理学部 医学部 工学部 農学部
11	金	2限	自然科学	文学部	教育学部	法学部 経済学部 経工学部 歯学部 工学部



後期				
1年生対象				
1	月	1限	作文	法学部 経済学部 経工学部 理学部薬学部 工学部
2		2限	作文	工学部 芸術学部
3	火	1限	作文	文学部 教育学部 医学部 歯学部 工学部
4		2限	作文	経済学部 経工学部 工学部 農学部
5	木	5限	会話 発表	文学部 教育学部 法学部 理学部 工学部芸術学部
6	金	5限	会話 発表	文学部 教育学部 経済学部 経工学部理学部 医学部 歯学部 薬学部 工学部芸術学部 農学部

この時間割りの特徴は、1年生の受講すべき科目を大きく4つに分け、全ての学部の学生が全ての科目を選択する機会が得られるように分散したことにある。そして担当する留学生センターの教員も総合基礎なら総合基礎を一人が2つを受け持つこととした。

教える側から見て、同じ内容を繰り返すことがどのようなものかが疑問視されたが、専門が異なる学生のクラスは、同じ内容であっても異なるダイナミクスがあり、そのクラスなりの運営があることが分かってきた。

クラスの構成も全て1年生あるいは全て2年生に分かれているので、指導がしやすくなった。

人数も、1クラス6・7人から10人と妥当なサイズにおさまっている。

しかしながら、現在もなお2年生の1学期のクラスは受講者数に偏りが見られる。

今後の課題としてはこれら人数配分に問題のあるところを改めることと同じ科目を担当した教員が共通に使える教材を開発していくことにある。

## 比較社会文化学府での実践報告

因 京子\*

平成16年度は、因京子・小山悟の2名が比較社会文化学府の「日本語教育講座」に所属する教員として大学院教育に携わった。

### 1 担当科目

因 京子

- ・日本語教育方法学 . . . .
- ・日本語教育調査研究方法論
- ・日本語教育総合演習
- ・日本語教育特別研究
- ・博士総合演習 .
- ・博士演習 .
- ・博士特別研究

小山 悟

- ・日本語教育学 . . . .
- ・日本語教育調査研究方法論
- ・日本語教育総合演習

### 2 担当学生数

因 京子 修士17名 博士9名 研究生4名  
小山 悟 修士4名

### 3 修士号の取得状況

平成16年度に因京子が指導教員として修士号取得までの指導及び審査に関わった学生の氏名と修士論文の題目は以下の通りである。 は、世話人教員を務めた。

飯田美穂子「理系の中国人留学生の外来語・専門用語の理解度調査 - 理系の中国人学生に必要な

---

\*九州大学留学生センター助教授

教材構築に向けて -」

今枝美知子「小学校英語教育の発展に向けての研究 - コミュニケーション教育の再考を中心に  
して」

王晓梅「中国人日本語学習者の日本語談話におけるレベルの機能の認識について - 丁寧体と普通  
体の使い方に着目して -」

朴峰梅「中国人学習者の漢語の聞き取り能力の調査 - 漢字発音学習の重要性を意識させる教材作  
成を目指して -」

趙海城「連体節における『Vた』の形容詞的用法について - コーパスを利用した意味論的研究」

本多美保「中国語を母語とする日本語学習者と日本人日本語教師の規範意識の相違 - 日本にお  
ける日本語学校の教育現場を中心として」

李紅蘭「電子メールコミュニケーションにおける中日対照 - 催促のストラテジーの考察 -」

山田明子「日本語のアスペクト表現シテイタに関する意味論的・機能論的考察」

ク・モハマッド・ナビル「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析 - 謝罪意識、謝罪ストラ  
テジー、謝罪表現を焦点に」

#### 4 博士号の取得状況

平成16年度に因京子が博士号取得までの指導及び審査に関わった学生の氏名博士論文の題目は以下  
の通りである。 印は、主査を務めた。

蔡京希「日本語漢字教育に関する基礎研究と応用研究」

福間康子「日本語初級学習者のコミュニケーション力の向上を図るための訓練方法研究」

副島健作「日本語のアスペクト - 文法の解明と体系化の試み -」

黄英哲「インタビュー会話に見られる情報要求とその応答の技術について - 日本語母語話者と非  
母語話者の比較分析 -」

## 日本語 CAI(Computer Assisted Instruction) コース

鹿 島 英 一\*

通常の補講コース(週2回以上)と時間的に合わないなどの諸事情のある本大学の留学生や客員研究員を主対象とした日本語補講コースで、学習内容の入ったコンピュータの使い方を理解し、各学習者個々人に合った進度で、学習できる。初歩からサバイバルが可能なレベルまで対応できるだけでなく、既習者にはコンピュータで復習できる充分好い機会にもなる。参加申込みとコース選択にはある程度柔軟に対応している。

平成16年4月から新たにできたコースで、平成16年度はコース概要は以下のとおりである。

前期：平成16年4月12日～7月15日

CAI 1 火曜日 13:00～14:30      CAI 2 木曜日 13:00～14:30

後期：平成16年10月12日～平成17年2月10日(年末年始期間を除く)

CAI 1 火曜日 14:50～16:20      CAI 2 木曜日 10:30～12:00

担当教員：鹿島英一

教 室：CAI 教室(留学生センター4F)

レベル(目安)：CAI 1 平仮名の学習を一応終わった学習者。

CAI 2 初級の学習を一応したことのある学習者。

定 員：学習内容の入ったコンピュータの台数(10台弱)。

教 材：『研究留学生の日本語』(全24課)のCAI用教材

申込方法：留学生センター(箱崎キャンパス)の留学生課センター担当係(TEL. 642-2142)に所定の申請用紙に書き込んで、期限(前期は4月7日、後期は10月8日)までに提出。

概 要：学習者数は前期5名、後期5名で、学習者のレベルは極く初級から比較的高い中級までとバラエティに富んでおり、進度もコースの目的に比較的沿ったものであった。

---

\*九州大学留学生センター教授

## 日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム

岡崎 智己\*

### 0. はじめに

本プログラムは1998年の日韓共同宣言を受け、当時両国のトップにあった金大中大統領と小渕首相の発意により2000年から10年計画として開始された。今年で5年が経過したところである。計画当初は、毎年、韓国の高卒者200人程度を日本の大学（全て国立大学）の理工系学部に入学させたい意向であったようだが、実際には毎期100人程度の選抜、受入れ規模で推移してきている。

選抜された学生の半数には韓国政府から、また残りの半数には日本政府から予備教育期間を含めた5年間に渡り毎月奨学金が支給される。2005年は2001年4月に学部へ入学した本プログラム1期生が4年間の学士課程を修了して卒業した記念すべき年となると同時に、10年計画の半ばに達した年として、日韓両国の関係者の間では一つの山場と感じられているようである。

### 1. 九州大学での受入れ状況

これまでに本プログラムによる韓国の高卒者を受け入れた日本の国立大学は延べで39校あり、そのうち2004年度の受入れ分を含む5期生までの配置数が25名を超える大学は以下の7大学となっている。

東北大学 (27名)      筑波大学 (27名)      東京大学 (26名)      東京工業大学 (29名)  
大阪大学 (28名)      神戸大学 (28名)      九州大学 (28名)

また、本学における年度別受入人数は次の通りである。

2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
5名	5名	5名	5名	8名

上に示したように2004年度 (= 第5期) における本学への入学希望者は8名で、当該年度に関しては大阪大学と並んで全国で最も多い受入数 = 志願者数であった。参考までに5期生が留学希望先を決めるに当たって考慮したこととしては、第一に「学科・専攻に対する興味」、第二に「日本での生活の便利さ」、第三に「学校の認知度」、そして第四に「知り合いの勧め」を挙げている。筆者は2004年10月に来学した5期生8名の内の7名と、来日前の数ヶ月にわたって電子メールで数回ずつのやり取りを行ったが、彼ら/彼女らが本学を進学先として選んだ理由としては、本学ならではの学科・専攻の内容と韓半島にきわめて近いという地理的利便性、並びに福岡の町が持つ種々の魅力を挙げていた。そしてそこには確かに知人あるいは先輩等からの勧めという要素も強くあるようであった。本プログ

\*九州大学留学生センター教授

ラムに選抜された韓国の高校卒業者が日本での進学先を決定するとき、同プログラムによってすでに来日している先輩学生との間での（大学を超えての）情報伝達ネットワークと、そこで飛び交う受入れ各大学に関する種々の情報が大きな影響力を持っているようだという話を聞いていたが、5期生との来日前のメールのやり取りを通じて、それを実感する思いがした。

## 2. 渡日前予備教育

本プログラム生は、10月に来日する前の半年間（3月～8月）、韓国・ソウルにある慶熙大学校・国際教育学院で渡日前予備教育を受ける。慶熙大学校は本学とも交流協定を持つ韓国の有名私立大学であり、国際教育学院では韓国人学生に対して英語やフランス語等の外国語の教育を行うとともに外国人に対する韓国語教育を行っている。渡日前予備教育を行う機関を決定するに当たっては「公募」で決められたそうで、当時、韓国内の17もの大学・教育機関が名乗りを上げたが、提示された予備教育プログラムの内容・充実度からして慶熙大学校・国際教育学院が選ばれたということである。

以下では慶熙大学校・国際教育学院から提供された資料をもとに、当学院での渡日前予備教育の内容について簡単に紹介したい。

予備教育の最初の19週間（3月～7月最初）は日本語（週10コマ）、数学（週1コマ）、物理（週1コマ）、化学（週1コマ）、科学（週1コマ）、英語（週1コマ）、教養（週3コマ）、日本文化体験（週1コマ）の計19コマ/週（1コマ=90分）の授業が実施される。それに続く次の7週間（7月初旬～8月）では日本語（週17コマ）と教養（週1コマ）、日本文化体験（週1コマ）の計19コマ/週（1コマ=90分）の授業が行われ、韓国での予備教育の全課程を終了する。この期間中、学生は親元を離れ、全員が国際教育学院で寮生活をするそうである。

日本語に関しては、高校卒業時までの学習期間と到達度に個人差があり、そのレベルは一様ではないが、それでも来日までに少なくとも全員が日本語能力試験3級に合格することを目指した教育が行われる。学生によっては来日以前に同試験2級合格程度のレベルに達するものもいるという。（但し、参考までに述べると、これまで外国人私費留学生に求められた学部入学のための日本語能力は同試験1級合格程度であった。）

「数学」「物理」「化学」「科学」の理系各科目に関しては、前半の課程で高校卒業時までの学習内容における日韓のギャップを埋める作業＝補講を行うとともに、後半の課程では講義（の一部）を日本語で行うなどして、少しでも日本での留学生活に早く順応できるよう工夫されているという。更に「日本文化体験」や「教養」の授業では日本理解を促進させる活動や講義が行われ、また日本語によるプレゼンテーションのためのスキルを習うといったことも行われるそうである。

## 3. 大きな変更点

本プログラムの実施体制において、これまでに一度、大きな変更があった。それは留学先の決定方法と時期に関するもので、3期生までは韓国での渡日前予備教育が終了するまで、留学先（=日本の

大学) が決定されず、しかもそれらも必ずしも本人の希望に添うものとは限らなかったとのことだが、4期生からは本人の希望に応じて予備教育開始時にはすでに留学先 (= 日本の大学) が決定されるようになった。このため、というのが大方の見方であるようだが、4期生は (留学先が決定しているという安心感から) 予備教育期間中の学習意欲が低下し、勉学・生活態度に関する様々な問題が渡日前にも、また渡日後にも表われ、関係者を大いに落胆させ、かつ心配させたと伝え聞いている。筆者はこれまで本プログラムの予備教育にはまったく関わってきていなかったので、それ以前の学生と比べ、本学で受け入れた4期生に何か顕著な問題があったかどうかを直接知らず、その実態について具体的に述べることができない。ここでは、前任者からそうした「4期生特有の問題」についての引き継ぎ事項は特になかったということを書き止める。

ともあれ、そうした事態を憂慮した慶熙大学校・国際教育学院では、5期生の予備教育を行うに当たり、4期生で露呈した様々な問題を予防すべく、1) 学則の強化 (特に出席の徹底)、2) 学生への個別ケアの強化 (例えば、面談やチューター制度の導入)、3) 日本側との連携の強化 (先に触れた電子メールでの交流等)、そして4) 日本関連科目の増設等々を行うことで対処したとのことである。その成果の表れかとも思われるが、筆者が電子メールでやりとりを行った7名 (本学進学予定者8名中の7名) の学生は、皆、なかなかしつかりとした考えをもって本学への進学を決め、そして来日に備えて熱心に勉学に励んでいるように感じられた。

#### 4. 本学における予備教育

来日後の本学における予備教育について述べる。授業科目は「日本語」「日本事情」「数学」「物理」「化学」「英語」の6科目で、授業期間は10月～翌年の2月までである。平成16年度の場合、一週間の時間割は以下ようになっていた。

	月	火	水	木	金
8:40 - 10:10	日本語 (各自のレベルに合わせて相当クラスを適宜受講)				
10:30 - 12:00	数 学	化 学	英 語	数 学	物 理
1:00 - 2:30	日本語 (各自のレベルに合わせて相当クラスを適宜受講)				
2:50 - 4:20	日本語 (各自のレベルに合わせて相当クラスを適宜受講)				日本事情
4:40 - 6:10	日本語 (各自のレベルに合わせて相当クラスを適宜受講)				

時間割を見て分かるように「日本語」を除く他の科目については一週間に一回 (90分) の割合で (但し、「数学」は二回) 授業が行われた。各科目の担当者は以下の通りである。

日本事情	留学生センター指導部門教員	数 学	理学研究院担当教員
物 理	工学研究院担当教員	化 学	工学研究院担当教員
英 語	言語文化研究院担当教員		

「日本語」については、これまで本プログラムだけのための日本語クラス (= 1レベル・1コース) が設けられてきたが、5期生についてはそうしなかった。その理由の第一は来学者8名の日本語のレベルが一樣ではなく、1レベル・1コースでの受入には相当な無理があったからである。また、学生

を常に本プログラムのためだけのクラスに「囲って」予備教育を行うのでは、ある意味で本プログラム生を日本人学生や他の留学生から隔離することになり、それは必ずしも本学での学生生活への適応を促す助けにならないと考えたからでもあった。特に、本プログラム生は来学時にはすでに一定の日本語力があり、また本学には約200名の韓国人留学生がいて、その大部分は大学院で学んでいる。ある意味で、勉学と人生の先輩ともいえるそうした先輩学生とも日本語クラスで接することで、日本の大学に学ぶということについてのノウハウや心構えを身につけて欲しいと期待したのである。そこで、全員に改めて日本語（文法・語彙・読解・聴解・会話力）のレベル判定テストを行い、本人の希望も考慮しつつ、留学生センターで開講しているレベル別・技能別の全学補講・日本語コース（JLC）の相当するクラス（複数）に編入させた。また、日本語力が上位にある学生については、同じく留学生センターで開講している日本語・日本文化研修コース生のための上級日本語クラスの一部も受講させるようにした。

## 5. 本プログラムの特徴及び問題点

東京工業大学で開催された平成16年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会において、来日した韓国での渡日前予備教育担当者から、高校を卒業したばかりの若い韓国人学生の特徴について以下のような意見が述べられた。

自主性に欠ける傾向がある一方、学校の規則や教師の言葉にはよく従う。

よって規則、罰則で縛れば学生は休まず、怠けない。

ゆえに厳しく指導することが望ましい。

また、本プログラムの予備教育に携わってきた日本側関係者から、次のような指摘があった。本プログラムの今後を考える上で、たいへんに貴重な示唆が含まれていると思われるので、順不同で以下に挙げる。

漢字力が弱い（渡日前予備教育で学習する漢字は通常500字程度に留まる）。

暗記式の受験勉強には強いが、思考力を問う記述式の問題には弱い。

日韓の教育スタイルの違いもあり、特に数学（的思考）に弱い／慣れていない。（なお、数学力と日本語力との相関はないとのこと。）

学部入学後、留年した（＝4年間で卒業できない）場合、当初の4年間を超えた期間には奨学金がつかず、その分は自費で賄わなければならない。

逆に飛び級をして3年間で学部を終了し、4年目に大学院に入学しても奨学金は学部課程で打ち切れ、大学院課程で継続支給されることはない。

学部卒で帰国しても、学閥主義の強い韓国では日本の大学（学部）卒はほとんど社会的に認められず、よい就職先を探すことは困難である。

本プログラムは学部課程のみを支援するもので、成績の優秀な学生が大学院へ進学しても奨学金は継続支給されない。

学部在籍中に韓国の兵役義務を果たすと、当プログラムからは除外されてしまう。



学部卒業後に兵役に就いた場合、今度は大学院進学に支障をきたす。

当プログラム参加者＝高校卒業生は、他の韓国からの留学生に比して年齢が若く、しかしまずまず潤沢な奨学金を受給しているため、同じ韓国人留学生（特に私費留学生）との間で不公平感が広がっているようである。

まず、韓国の予備教育関係者から指摘された本プログラム生の特徴・傾向についてであるが、筆者が関わった5期生に関して言えば、もちろん学生間で個人差はあるものの、同年代の日本の若者と比べて大きく異なるところはないように感じられた。そもそも17、18歳で自己の将来についての確乎たる見通しを持って、日々の勉学に怠りなく刻々と励む学生もいなくはないだろうが、それはどこの国でも極めて少数の例外的な存在であろう。同年代の若者の多くは、逡巡し、試行錯誤を繰り返しながら、徐々に自己の行く末を確定していくのではないだろうか。もっとも、5期生と接していて、日本人同士であれば言葉にはっきりと表さなくとも察してくれる・もらえる部分を言葉にはっきり出して伝達する必要を感じることはしばしばあった。しかし、これは本プログラム生に限らず、一般に留学生の多くに当てはまることであって、問題と言えるほどのものではないと思う。本プログラム生の生活態度や勉学に対する姿勢で、筆者が唯一気になったのは、時として「日韓政府から奨学金を受給している」という自覚に欠けるきらいの見えたことである。私費で留学してきているのであれば、ある意味、留学中の時間をどのように使おうと個人の判断・決定であり、その結果、留年あるいは退学に至っても自己責任の範疇と言えるかもしれない。しかし、日韓の政府から奨学金を支給されての留学となると、選ばれて奨学金を受給するものとしての責任が生じる。特に、本プログラムで支給される奨学金には上で指摘されたような制限・制約のつくことから、常に「後のない」状態・状況で学士課程の勉学を遂行していかなければならない。自己の置かれた、そうした厳しい状況について、必ずしも十分に自覚しているとは思えないふしがあったので、個人面談を行った際に、予備教育の進行状況を確認するとともに、政府奨学金を受給するについて生じる責任と本プログラム奨学金の支給制限・条件について、各自に注意を喚起した。

もっとも上で触れた本プログラムの奨学金の支給期間・支給条件については、一考を要する点があるのも事実と思われる。先に述べたように、日韓プログラム生は常に「後のない」状態・状況で学士課程の勉学を行っていかねばならないわけだが、それを生活習慣の異なる日本という外国の地で日本語＝外国語で行わなければならないのである。本プログラム生にとって、これは相当なプレッシャーとなるであろうことは想像に難くない。その一方、日本の大学（学部）を卒業しただけでは社会（＝韓国）的にあまり認知されず、かといって大学院へ進学しても奨学金は継続支給されない。こうした状況・条件は本プログラム生のモチベーションを維持する上ではマイナスの要因でしかないと言わざるを得ない。更には兵役義務をいつ果たすかといった問題も本プログラム生にとっては頭痛の種であろう。将来有望な韓国の青年を選抜し、日本の大学で理工系の知識・技術を習得してもらい、これからの日韓交流の礎となってもらおうというのが本プログラムの目指すところであるのならば、日韓政府の関係者の方々には、奨学金の支給期間・支給条件について、ぜひとも再考していただきたいところである。

最期に、本学における本プログラム生の受入体制について触れておきたい。これまで、本プログラ

ム生が10月に来日した時点では留学生センターが受入先となり、翌年の3月（実質2月）まで、留学生センターの教員と工学研究院、理学研究院、言語文化研究院の教員が協力して予備教育を行ってきた。その間、進学先である工学部は理系専門科目の一部を担当する教員を週に一度出講させるものの、留学生（第1～5期生）に対する種々のケアについては全く関わっていない。半年間の予備教育が終了し、4月に工学部へ入学したところで留学生の所属も工学部に移るが、学部入学以後の本プログラム生については、今度は留学生センターのほうで全くあずかり知らないという状態になっている。これは留学生センターがその設立当初から実施してきたもう一つの国費留学生のための予備教育プログラム、「日本語研修コース」の形態を、恐らく無意識・無自覚のうちに、踏襲したためかと思われる。しかしながら、「日本語研修コース」は大学院入学前の予備教育であり、受講者は当該コース終了後、進学先の大学院において研究室単位で受入が行われ、一対一の体制で指導教員から目の行き届いた勉学上、また生活上のアドバイスや指導を受ける。（そうした指導教員との関係は来日直後や「日本語研修コース」受講中から開始される場合も多い。）しかし、日韓プログラム生の場合は学部への進学であるため、その他大勢の一般の学生と紛れてしまい、今のところ、その一人一人の動向に工学部の教員が十分に注意を払う体制にはなっていない。大学院進学者に比して、年齢的にも若く、社会経験も浅い日韓プログラム生は、前段で触れたように厳しい条件付きでの奨学金の支給を受けて学士課程に学ぶわけであるから、本来であれば大学院進学者以上に勉学上、生活上のケアや指導が必要になると言えよう。本学が今後とも本プログラム生を受け入れ、その教育に責任を負うのであれば、進学先である工学部と留学生センターの役割分担や連携のあり方を含む受け入れ態勢の根本的な見直しを図るべき時に来ていることを指摘して、本稿を終える。

#### 参考文献

「日韓プログラムのこれまでの5年・これからの5年」東京工業大学留学生センター，2004

## 日本語・日本文化研修コース

清水 百合\*

### 1. はじめに

九州大学における日本語・日本文化研修コースは様々な変遷を経て、現在は留学生センターが担当している短期留学プログラムの一つとなっている。

### 2. 歴史的変遷

まず平成12(2000)年以前は、研修生の受け入れは各学生の専攻部局が行い、専門に関する指導はその部局の指導教官が、日本語は留学生センターの全学補講(JLC)の上級を受講というような体制で指導が行われていた。

しかし、上記の体制では日本語・日本文化というような専門以前のあるいは専門よりは幅広い学際的な教育を効率的に行うことができないという反省に基づき、平成11年秋に組織の改編を行い、平成12年度から日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れを行うことになった。

平成12年度からのコース概要は以下の通りである。

1. 受け入れ定員 10名
2. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の9月30日まで
3. コースの内容

日本語コースと日本文化・日本事情コースの二つを設け、ともに修了に必要な時間数は600時間とした。

#### a. 日本語コース

- |         |           |        |         |
|---------|-----------|--------|---------|
| 1) 日本事情 | 前後期各 60時間 | 計120時間 |         |
| 2) 日本語  | 前後期各150時間 | 計300時間 |         |
| 3) 課題研究 | 前後期各 60時間 | 計120時間 |         |
| 4) 関連科目 | 前後期各 30時間 | 計 60時間 | 総計600時間 |

#### b. 日本文化・日本事情コース

- |         |           |        |         |
|---------|-----------|--------|---------|
| 1) 日本事情 | 前後期各 90時間 | 計180時間 |         |
| 2) 日本語  | 前後期各 90時間 | 計180時間 |         |
| 3) 課題研究 | 前後期各 60時間 | 計120時間 |         |
| 4) 関連科目 | 前後期各 60時間 | 計120時間 | 総計600時間 |

---

\*九州大学留学生センター教授

上記の二つのコースの主な違いは日本語の受講時間数である。

この新体制で、日本語は以前のように全学補講（JLC）を受講し、また課題研究の指導は留学生センターの教員が当ることになり、以前より学生を身近において指導することが可能になった。

平成12年度からの受け入れ人数は以下の通りである。

平成12（2000）年度 5名      平成13（2001）年度 2名  
平成14（2002）年度 2名      平成15（2003）年度 9名

さらに平成15年度に改編を行った。専門を異にし、また日本語のレベルや日本に関する知識が様々な学生に上記のように一律の必修受講時間数を設けることが必ずしも研修生にとって好ましい学習環境ではないことを考慮したものになっている。

平成16年度よりのコースの概要は以下の通りである。

1. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の7月31日まで
2. コースの内容

必修科目 1) 日本語（上級）	前後期各 4 単位（120時間）		
2) 日本語・日本文化概論	前後期各 2 単位（30時間）		
3) 課題研究	前後期各 2 単位（60時間）		
4) 日本語学	後期 2 単位（30時間）		
5) 日本語教育学	前期 2 単位（30時間）	計18単位	420時間
選択科目 1) 学部の講義	前後期各 2 単位（30時間）	計 4 単位	60時間
		総計22単位	480時間

### 3. 目的

日本語・日本文化研修留学生が、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることを目的としている。

### 4. 受講できる科目

日本語・日本文化研修留学生は、留学生センターで開講される「日本語（上級）」、「日本語・日本文化概論」、「日本語学」および「日本語教育学」などの必修科目の他に、各自の日本研究に関する専攻分野と日本語能力に応じて、文学部、経済学部、法学部などで開講される日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業を選択科目として受講することができる。

### 5. 課題研究

更に、日本語・日本文化研修留学生が各自の関心に応じて日本研究に関するテーマを設定し、指導教員による個別指導を受けることができる「課題研究」を必修科目として開設している。

### 6. 単位認定

本コースで履修した科目は、「課題研究」を含めて、成績認定が行われ、所定の要件を満たした日本語・日本文化研修留学生には修了証が授与される。また、UCTS（UMAP 単位互換方式）等を用いた単位互換に応じることができる。



上級日本語の科目名は以下の通りである。

- 上級日本語 1 「日本人の横顔」
  - 上級日本語 2 「マンガで学ぶ日本語と日本社会」
  - 上級日本語 3 「社会問題に見る日本社会」
  - 上級日本語 4 「人と社会を考える」
  - 11月6日 見学旅行 熊本城 阿蘇 黒川温泉
  - 12月25日から1月10日まで冬休み
  - 2月18日 前期授業終了
  - 2月19日から4月10日まで春休み
  - 4月8日 防災センター見学
  - 4月11日 授業開始
- 平成17年春学期時間割り (必修科目のみ)

	月	火	水	木	金
1					
2		上級日本語 1	上級日本語 3	上級日本語 4	
3		日本語日本文化概論			
4					
5		上級日本語 2		日本語学	

上級日本語の科目名は以下の通りである。

- 上級日本語 1 「現代日本社会」
- 上級日本語 2 「社会問題に見る日本社会」
- 上級日本語 3 「歴史から見る日本、教育から見る日本」
- 上級日本語 4 「ジェネレーション Y」
- 4月22日 課題研究中間発表
- 7月15日 後期授業終了
- 7月20日 課題研究最終発表
- 7月21日 修了式 (予定)

#### 4. 日本語・日本文化研修コースの特徴

一般的な傾向として日本語・日本文化研修生 (以下日研生とする) は既に数年の日本語学習を母校で行ってきており、九州大学留学生センターの全学補講コース (JLC) においては上級のレベルに達している。その内何名かは前に日本を旅行したことがあったり、また日本の大学で日本語を勉強した経験があったりして日本での生活には馴染んでいる。そのような学生が仲間にいると、日本が初めての学生であっても適応のスピードははやく、ほとんどの者は一ヵ月もすると自分達で計画をして、休みに旅行をしたりするようになる。生活面ではほとんど心配がない日研生の学習は、十人十色で何が

どのくらい出来て何がどのくらい出来ないかは一概に述べることは難しいが、他の留学生と同じく日本語に関しては以下のような傾向があると言える。

- 文法力は正確である
- 圧倒的に語彙数が足りない
- 話す力に関しては個人差が大きい
- 聴解力、特に専門の講義を聞く力がない
- 読む練習に比べて書く練習が不足している

これら日研生への指導としては、来日直後のオリエンテーションにおいて、一般的な話として留学生には以上の傾向があることを話し、10ヵ月のコースでは、前半にそれぞれの弱点を強化するように受講科目を選択することと課題研究のテーマ決定、データ収集を行うことを、後半には課題研究の完成と学部での授業を日本人学生と共に受講することを勧める。「せっかく日本に来たのだから、できるだけ日本語が上手になって帰りたい」と思っている学生に、「初めは弱点の強化」はあまり魅力的には映らないが、それをどれだけ説得できるかが後半の伸びを左右するだけに、コーディネーターの力量を問われる所だと考える。

## 5. 日本語・日本文化研修コースの課題

これらの学生に共通しているのは、日本語が上級レベルであるということだけである。

しかしながら、同じ上級レベルの中でも様々なハンディの違いがある。程度の差はあるがそれぞれの日本語の問題点を学生たちに自覚させるのがまず困難である。例えば一概に「語彙が少ない」といっても、漢字圏の学生と非漢字圏の学生では困難な範囲が異なる。漢字圏の学生は見て意味は分るが日本語で使い分けられている細かい意味の違いは分らない。また非漢字圏の学生はまず教材に出てくる漢字語彙の数の多さに圧倒されてしまう。しかし、それを乗り越えると今まで一語ずつ学習してきた語彙の知識を応用して新しい語彙も類推して読むようになる。これらの学生には個別にまた段階的に学習方法の指導が必要となる。

また上級日本語の内容についても、どのような科目を用意してもある者には既習の事項であり、またある者には全く未習の事項となる。それゆえ当たり前「上級日本語」と銘うって授業を行っても、「難しすぎる」と同時に「易しすぎる」のである。これについては、易しすぎると考える者がいる箇所については宿題とし、難しすぎると考える者がいる箇所については、関心がある者にのみ紹介するという方法をとったり、また従来読み物は読み物という切り口ではなく、読み物についてグループでお互いの意見を交換させ、より深い考えを提案させるなどの授業の方法を工夫しなければならない。

さらにコース半ばにして、日本の大学で大学院を目指す研修生がいる。これらの学生が大学院に進んだ時に、日本人の学生と互角に競えるような学習方法を身に付けさせることも考えていきたい。

## JTW Program 2002－2005

今 井 亮 一\*

### 目次

1. はじめに
2. 組 織
3. 沿 革
4. 目 的
5. 学事歴
6. 内 容
7. 課 題
8. 終わりに

### 1. はじめに

本稿では、2002年10月から2005年7月にわたる、Japan in Today's World (JTW) プログラムの実施状況の概要を報告し、課題の考察を行う。当プログラムは、毎年10月に開講し、翌年7月に終了するというサイクルで運営されている。本稿では、2005年11月現在での事実を元に、第8期から第11期までの実施状況を報告する。<sup>1</sup>

### 2. 組 織

JTW プログラムは、九州大学が責任をもって提供する「全学プログラム」であり、「短期留学教務委員会」が教務上の意思決定機関である。その下に、実施面の詳細を審議する「短期留学専門委員会」が置かれている。指導の実務は、留学生センターの「短期留学部門」に在籍する教授1名、助教授1名が、「JTW コーディネーター」として担当している。事務上の支援は、国際交流部が行っている。

### 3. 沿 革

JTW プログラムは、1994年（平成6年）10月に、米国大学生15名、韓国大学生3名の計18名を受け入れてスタートした。翌1995年にはすでに現在の規模に近い31名を受け入れている。以後年間30人弱を北米、ヨーロッパ、アジアから受け入れて実施してきたが、2004年開始の第11期から増員を開始し、現在では、35人前後の留学生が在籍している。これまでの応募者、入学者、修了者の推移は、表

---

\*九州大学留学生センター助教授



1のようになっている。近年の傾向として、地域的にはアジアの学生、性別としては女子学生の入学が増えている。

#### 4. 目的

JTWは、北米、ヨーロッパ、アジアからできるだけ偏りなく学生を受け入れ、期間1年にわたり指導している。当プログラムを構成する三つの柱は、英語による講義、自主研究 (Independent Study Program, ISP)、見学 (Field Study) であるが、これらを通じて、留学生が日本を幅広く理解し、日本に関する情報を英語で世界に発信できる人材となることを目的としている。

#### 5. 学事歴

JTWは10月初日に開講し、翌年2月末日に第1学期(秋学期)を終了する。3月は春休みであり、4月に第2学期(春学期)を開講し、7月末日に終了し、課程修了を認定する。各学期、4回程度のField Studyという名前の研修小旅行(日帰りまたは1、2泊)がある。学期末に、定期試験およびISP報告会が行われる。

#### 6. 内容

JTWは以下のような個別要素から構成されている。

1. 授業科目
2. Independent Study Program (ISP)
3. Advanced Research Laboratory (ALR)
4. 日本語科目
5. Field Study
6. Tutorship
7. Host Family Program

以下、それぞれについて順に説明する。

##### 6 - 1. 授業科目 (必修)

JTWの一年は、10月から2月までの秋学期、3月の春休み、4月から7月までの春学期から構成されている。各学期、8から10の英語による科目が開講されている。これは、広範な分野(歴史、政治、経済、社会、文化、科学技術等)における、日本についての基礎的な知識を留学生に与えることを目的としている。我々の特色は、すべての科目を英語を使用言語として提供することにある。講師は、英語で講義し、(基本的に)英語の教材を用い、成績評価を英語で書かれた試験、レポート等に基づいて行う。学生の質問や討論もすべて英語で行われる。科目は、留学生センター専任教員のみな

らず、学内外の各分野の専門家が担当する。すべての科目は、全学に開放され、留学生のみならず、日本人学生も履修することができる。科目一覧は表2参照。

これまで、形式上、科目は講義 (core course) とセミナー (advanced seminar) に分けられていた。講義では、文字通り、講師が各専門分野の基本的知識を提供する。一方、セミナーでは、教員が知識を提供するより、学生が教材に基づいて報告し討論することに主眼を置いている。セミナーは、第10期までは日本語の教材に基づき英語で議論するという趣旨で開講されていたが、第11期より英語の教材も用いられることとなった。講義とセミナーの形式的区別は、平成17年開講の第12期プログラムから廃止された。

#### 6 - 2 . Independent Study Program (ISP) (必修)

講義、セミナーと並び、ISP は、当プログラムの教学上の柱である。学内外の教員が指導教員となり、各学生が自主的に作成した研究計画に基づき研究を行う。目的は、日本社会に関する自発的な問題意識の育成にあり、テーマは、人文社会系の分野から選ばれることが多いが、理系の学生は、日本の先端科学技術に関する文献的研究を選択することもできる。研究成果は、所定の様式に基づき論文および口頭発表の形で全学に公開される。第10期までは、半年間のみプロジェクトを認めたが、第11期から原則1年間のプロジェクトを必修としている。最近の研究課題の一覧を、表3に掲載する。

#### 6 - 3 . Advanced Research Laboratory (ALR) (選択)

JTW では、理科系学生のために、九州大学の理工系研究院の研究室に所属し研究する機会を提供している。これによって学生は、各学期1科目の講義に相当する単位を取得できる。第10期までは、学生はISP、ALRのいずれかを選択することができたが、第11期より、ALRは選択科目となった。しかし、実際には、ALRを履修する学生は、研究室に机と椅子を与えられ、日本人学生と同様に、ほぼ毎日、終日研究に専念している。

#### 6 - 4 . 日本語科目 (選択)

JTW 学生は、自らの水準に対応した、言語教育としての日本語科目を履修し、日本語力を高めることができる。日本語科目は、留学生センターの日本語部門によって提供されているので、ここでは詳細な説明は行わない。

#### 6 - 5 . Field Study (選択)

JTW では、留学生に日本社会の「現場」を体験してもらうために、見学旅行を実施している。訪問先は、史跡、学校、工場に始まり、田植/稲刈り、有田焼、座禅、茶の湯の体験にまで及ぶ。最近の実施例を表4に掲載してある。

このうち、開講時(10月)のオリエンテーションでは、「異文化理解セミナー」を行い、慣れない外国での学生生活への円滑な導入を図っている。また、秋学期終了時(2月ないし3月)の再オリエンテーションでは、学生から半年間の感想や注文を聞き、プログラムの改善に役立てている。これら

二つのオリエンテーションは参加必須である。

#### 6 - 6 . Tutorship

JTW では、全学からチューターを募り、JTW 学生の修学・生活環境への適応を支援している。チューターとは別に、「日本語パートナー制度」があり、留学生には日本語力向上、日本人学生には外国語力向上の機会となっている

#### 5 - 7 . Host Family Program

学生の希望に応じて、Host Family を斡旋し、週末や休暇期間中に日本人の家族と過ごす機会を提供している。

### 7 . 課 題

JTW は現在、九州大学の国際化戦略の一環として、業務規模の拡大を図っている。第9期までは30人前後だったのが、第12期では40人を超える見込みである。これに伴い、様々な問題点が顕現しつつある。

まず、最大の課題として、英語で講義することの重い負担から、授業科目担当者を探すことが慢性的に困難となっている。欧米は言うまでもなく、平均的にみてアジアの大学ですら、英語による講義は幅広く行われており、学生の英語力も高い。これに対して、我が国の大学教員の平均的英語力は残念ながらかなり低く、留学生の期待水準をクリアすることができる英語力を駆使して講義できる人材の数は限られている。特に、文系の場合、英語で論文を書いたり外国の学会で発表したりすることが必ずしも一般的でない分野が多く、教員に高度の英語力を求めるのも酷である。しかるに、こういう日本特殊な分野こそ、留学生の関心もまた高いのである。工学、自然科学や経済学など、英語使用頻度の高い分野では、英語で講義できる人材発掘は比較的容易であるが、これら学問を、わざわざ日本で学ぶ必要性は低い。一方、文学、歴史、社会、芸術、哲学・宗教・思想といった分野には、英語で講義できる人材は乏しいが、これらの学問を日本で学ぶ意義は非常に高い。また、これら比較的に世界に知られていない分野にこそ、世界共通語である英語を用いて情報発信できる人材の育成が重要であるともいえるのである。以上のような背景で、JTW では、比較的少数のエキスパートたちに、毎年講義を依頼している状態である。分野的にも偏りがあり、特に日本史については2004年から、適当な人材が見出せず講義ができない状態となっていて、至急改善が必要である。

次に、ISP（独立研究）では、規模拡大にともない、研究を指導できる教員の不足が深刻化している。特に、2004年からは全学生が通年プロジェクトを行うことになったので、事実上、指導教員の必要人数が倍増した。実際には、新たな人材の発見はなかなか困難なので、一部の教員に複数の学生の指導を依頼しなければならない状態となっている。一方、通年プロジェクトとなった結果、学生も以前よりは多忙となり、各学期末の報告会の直前に集中的に研究せざるを得ない。分野的には、比較文化、社会学、経営学は人気があり、全員の学生をもっとも相応しい指導教官に割り当てることができ

ないのが残念である。制度的に JTW を支援する体制を全学的に確立する必要がある。

以上、講義と ISP・ALR について、気が付く限りの問題点を述べてきたが、Field Study、Tutorship にも、若干の課題がある。

まず、Field Study である。単なる「物見遊山」であってはならないということで、「事前講義」と「事後レポート提出」を設けた。前者は、本学教員が実施日の数日前に1時間程度、見学の意義について解説するものであり、後者は、見学旅行実施後、学生に感想文を提出させるものである。しかし、講義の出席状況、レポートの提出率は必ずしも高くない。そもそも、Field Study そのものは科目でなく、単位を与える活動ではないが、見学当日の出席率は非常に高く、毎回、9割方の学生が参加する。つまり、学生にとっては、Field Study は明らかに魅力あるプログラムなのであるが、科目ではないので、事前講義やレポートをまじめにやるインセンティブは低いのである。あらかじめ時間割に書いて事前講義に出席することを義務付けることも、他の科目時間との重複もあり、不可能であろう。

そこで、現在、事前講義やレポートの実施形態に関して、若干の改善を考えている。例えば、学生が求めているのは、何より見学当日の解説の充実であろうから、事前講義に代えて当該分野の専門家に同行してもらふことである（事前講義してもらえればなお良いが）。しかし、これは専門家のスケジュールとの調整が問題となるので、義務付けることはやはり難しい。一方、レポートについては、自由作文ではなくアンケートのような形にして、学生に何かを勉強したかのようなポーズを取らせることを目的とせず、むしろ今後の Field Study の改善に役立てる資料として活用することを検討している。

次に Tutorship であるが、最近、九大学生の情報力というものの無視できない大きさを痛感している。例えば、アカデミクスでは当然のことだが、ISP 指導教員と学生の関係がうまく行かなくなることがよくある。このような場合、コーディネーターが指導教員に文句を言い、指導状況を改善してくれるように要求することは、必ずしも得策でない。指導教員としては、学生の「密告」を快く思わず、関係がいつそう難しくなることもありうるであろう。学生も、その教員とはこれ以上あまり関わりたくなく、形式的に指導教員でいてくれれば十分であると考えている場合も多い。いずれにしても、九州大学としては、学生の満足度を最重要目的とすべきであるから、このような場合は、Second Opinion、すなわち指導教員とは別の教員のアドバイスが利用可能な環境を学生に提供していくべきであろう。しかし、コーディネーターが、そのような Second Opinion の提供者の所在をあらかじめ把握することは実際問題として不可能に近い。すでに述べたように、JTW に協力的な教員の数は限られており、特定分野の専門家でしかないコーディネーターに、学生の特殊な関心に応えられる専門家を発見することは困難である。このような場合、非常に強力なのは、日本人学生からの情報提供である。例えば、最近、研究の進行によって指導教員の関心領域から逸脱してしまった留学生が、たまたま、当該分野の学生と知り合いになり、彼らからの情報提供により、コーディネーターが Second Opinion の提供者となる研究者を紹介する、ということがあった。すなわち、チューターには JTW 学生の生活面だけでなく、修学上の相談にも乗ってもらい、必要に応じて情報をコーディネーターと共有することによって、より効果的に JTW 学生の修学を支援していくことができると考えられる。

最後に、アジア重視の副作用、とも言うべき問題がある。JTW の受入枠拡大が主としてアジアからの留学生数を増加させていることは、アジアにおける日本の重要さ、急速な経済発展によるアジア諸国の留学熱の高まりを考えれば当然の結果であるが、これにともない、欧米からの留学生がややもすれば少数派となり、適応に困難を感じる場合が多くなっているように見られることはたいへん遺憾である。この点についても、チューターのいっそうの活用により、留学生同士固まるのではなく、積極的に日本人学生の中に溶け込んでいくように指導していくことが課題である。

## 8. 終わりに

以上、JTW の現状と課題につき、整理と考察を行った。本稿では、プログラム全体に対する評価の問題を取り上げなかった。プログラム評価と言っても、学生からの評価、教員からの評価、組織としての大学からの評価、学外からの評価など、様々な次元がある。これらについては、いずれ、稿を改めて報告させていただきたい。

### 注

1. 2000年7月終了の第6期プログラムまでの実施状況については、「九州大学留学生センター：自己点検・評価報告書」（2002年2月刊行）に詳細な記述がある。筆者は、2002年9月着任のため、第7期、第8期の実施状況について知識を有しない。したがって、これら2期については、章末における図表による情報提供にとどめる。

表1 JTW 採用者（応募者）一覧表

	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
計	18(50)	31(48)	30(49)	26(40)	22(35)	28(32)	22(36)	29(40)	24(25)	32(35)	42(63)
修了者数	17	28	22	24	18	24	22	29	24	32	

### 内 訳

	国	大学名	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	
ヨ ー ロ ッ パ	イ ギ リ ス	バーミンガム								1(2)	1(1)			
		ブリストル								2(2)		2(2)	1(1)	
		シェフィールド												1(1)
		ケンブリッジ					2(2)	1(1)						
ヨ ー ロ ッ パ	ベル ギー	レウヴェン			2(5)	2(5)	1(1)	2(5)	1(4)	2(2)	1(1)	0(1)	2(3)	
		ルーヴァン		0		1(1)	2(2)	0(1)						
ヨ ー ロ ッ パ	フ ラ ン ス	ジョセフフォーリエ							1(1)		1(1)		1(1)	
		ルイバスツール												1(1)
		マルクブロック										1(1)	1(1)	
		ピエールマンデス									1(1)	1(1)	2(2)	1(1)
		スタンダール								0(1)	0(1)			
		ロベールシューマン							2(2)	2(2)	1(2)			1(1)
		ローレンス												1(1)
ヨ ー ロ ッ パ	独 国	ホーエンハイム											1(1)	
		ミュンヘン			0(2)	1(1)	1(1)	2(2)	1(1)	1(1)		1(1)	1(1)	



表2 開講科目例

学 問	分 野	タ イ ト ル	開講頻度
自然科学	医 学	Medicine in Japan	臨時
自然科学	医 学	Pharmaceutical Science in Today's Japan	臨時
自然科学	工 学	Design and Engineering	臨時
自然科学	工 学	Supply and Demand of Energy : Present and Future	臨時
社会科学	経 営 学	Corporate Management Analysis in Practice	臨時
社会科学	経 営 学	Small Firms in the Japanese Economy	臨時
社会科学	経 済 学	Current Issues in the Japanese Economy	毎年
社会科学	経 済 学	Introduction to the Japanese Economy	毎年
社会科学	経 済 学	Seminar in the Japanese Economy	毎年
社会科学	国際関係論	East Asia's Contribution to International Social Development	臨時
社会科学	国際関係論	Globalization in International Political Economy	臨時
社会科学	社 会 学	Advanced Seminar in Japanese Society	毎年
社会科学	社 会 学	Contemporary Japanese Society	毎年
社会科学	社 会 学	Gender in Contemporary Japan	毎年
社会科学	社 会 学	Gender Studies in a Comparative Perspective	毎年
社会科学	心 理 学	Urban Psychology in Asia	毎年
社会科学	人 類 学	Japan as Anthropological Object	毎年
社会科学	政 治 学	Japanese Political Doctrine in the 20th Century	臨時
社会科学	政 治 学	Political Leadership in a Comparative Perspective	臨時
社会科学	政 治 学	Seminar on Japanese Politics Today	毎年
社会科学	法 学	International Business Transactions	毎年
社会科学	法 学	International Law and Politics in East Asia	臨時
社会科学	法 学	Japanese Crime and Criminal Justice	毎年
人文学	言 語 学	Debate: Controversies in Today's Japan	臨時
人文学	言 語 学	Linguistic Description of Japanese	毎年
人文学	文化(現代)	Contemporary Japanese Culture	毎年
人文学	文化(現代)	Introduction to Japanese Films	臨時
人文学	文化(伝統)	Japanese Life through Tea Ceremony	毎年
人文学	文化(伝統)	Japanese Performing Arts : Noh, Kyogen, Kabuki & Butoh	隔年
人文学	文化(伝統)	Japanese Religion	臨時
人文学	文 学	Introduction to Japanese Literature	隔年
人文学	歴 史	Archaeological History of Japan	臨時
人文学	歴 史	Modern Japanese History	毎年
人文学	歴 史	Regional Studies in Japanese History	毎年

表3 ISP・ALR 課題一覧

分 野	タ イ ト ル	指導教員所属
医学・薬学	Policy of Separating Dispensing Practice from Medical Practice in Japan	医学
医学・薬学	The Secret of Japanese Longevity	医学
教育	Play Along, Get Along: Perspectives on Japanese Early Education	人間環境
教育	The Struggle Over the Hinomaru and Kimigayo in Japanese Postwar Public Education	留学生センター
教育	Japanese Elementary Education	留学生センター
教育	Educational Institutions for Western Studies in Tokugawa Japan	人間環境
教育	English as Communication: Japanese English Education Problems	言語文化

分野	タイトル	指導教員所属
教育	The Educational Channel of NHK; Utilization of Television for Education	学外
経済・経営	Japanese money, banking and financial markets	留学生センター
経済・経営	Sino-Japanese economic relationship in the 1990's	留学生センター
経済・経営	Employment and gender stratification in the new economy	人間環境
経済・経営	Japanese and Rice-What rice means to Japanese through the issue of rice trade	農学
経済・経営	THE CONSUMER COOPERATIVE MOVEMENT IN JAPAN	留学生センター
経済・経営	Traditional Japanese Pottery in the Modern Context	経済
経済・経営	A Japan-Thailand Free Trade Agreement	留学生センター
経済・経営	How to Promote Thai Tourism to Japan	経済
経済・経営	Japan's Lost Decade: An Inevitable Cyclical Phenomenon	留学生センター
経済・経営	Japanization: Importation of Japanese-style Management	留学生センター
経済・経営	Korea's economic development in a regional context	留学生センター
経済・経営	Building an East Asian Community	経済
経済・経営	Electronic Commerce in Japan	経済
経済・経営	Free Trade Agreement between Korea and Japan	留学生センター
経済・経営	Japan's Potentials and Limitations on Economic Recovery	留学生センター
経済・経営	Japan's Role in the Changing World Order	経済
経済・経営	The Case Study of Japan's OVOP and Thailand's OTOP	農学
経済・経営	The Organization, the Group and the Worker: An Analysis of the Japanese Organizational Behavior and Human Resource Management Style	留学生センター
経済・経営	The Video Game Industry in Japan	留学生センター
経済・経営	What is the Charm of LEXUS? - A Japanese Car Storms the World's Luxury Car Market	経済
工学	An Insight into the World of Computer Generated Imagery	システム情報
工学	Constructing a Model of the Human Arm for use in Humanoid Robotics Systems	工学
工学	Fabrication of a micro heat pipe with MEMS Technology	工学
工学	The Protocols in Internet Technology	システム情報
工学	An Insight Into Computer Generated Imagery Part 2: Physics based Simulations	システム情報
工学	ANALYSIS OF ARM MUSCLE DYNAMICS FOR APPLICATION IN HUMANOID ROBOTIC SYSTEMS	工学
工学	Fabrication of A Thermal-Bubble-Actuated Micro pump with Bubble Valve	工学
工学	Understanding and Designing Internet Application	システム情報
工学	Labeling of moving objects determined with the Fast Level Set Method	システム情報
工学	Phosphorylated peptide synthesis Toward analyzing function of phosphorylated protein	工学
工学	The Radioactive Legacy of the Atomic Bomb	工学
工学	Josephson Current Suppression in a Superconducting Tunnel Junction with Gaussian Distribution Geometry	工学
工学	Selective Staining of Phosphoprotein in SDS-PAGE	工学
工学	The Fast Level Set Method with the use of an Inertial Extension Velocity Field	システム情報
工学	Robotics and Mechatronics Development in Japan	工学
社会・文化	No Place Like Home: Regional Identities in Kyushu	留学生センター
社会・文化	Shintoism and Buddhism in Japan	学外
社会・文化	Swords in Japanese Society: a cultural and historical perspective	留学生センター
社会・文化	Ubiquitous Uniqueness: Evolution of Characters in Miyazaki Hayao's Animation	学外
社会・文化	Destructing Japanese Motherhood Ideology: Feminist and Historical Perspectives	学外
社会・文化	Japanese Comic Art and Animation: Is science fiction a window to the future or purely dismissible entertainment?	学外



分野	タイトル	指導教員所属
社会・文化	Japanese Women's Empowerment via Participating in NGOs	学外
社会・文化	The Crusade of Brakumin	法学
社会・文化	Working Women in Japan	学外
社会・文化	A Coincidence of Time and Culture: The Lucky Dragon V Incident	留学生センター
社会・文化	College Student's Usage of Mobile Technology in Japan	比較文化
社会・文化	Comparison of Korean and Japanese Tea Ceremony	学外
社会・文化	Japanese Cinema: Tradition and Modernity	学外
社会・文化	Manga's Graphic and Linguistic Possibilities of Expression	学外
社会・文化	Playing with Culture: An Argument for Video Games Arcades as Cultural Loci	比較文化
社会・文化	The Current Situations and the Success Factors of Japanese Animation Business	学外
社会・文化	A Life as Seen Through Letters: Reflections and Interpretations of the Showa Emperor in his Final Days	留学生センター
社会・文化	Are the Japanese People Collectivists or Individualists?	法学
社会・文化	Burakumin Discrimination and Human Rights in Japan	法学
社会・文化	Human Trafficking and a Shamed Japan	学外
社会・文化	Response in Environmental Crisis	留学生センター
社会・文化	The Image of Hong Kong In the eyes of Japanese Youngsters	比較文化
社会・文化	The Japanese Yakuza: Putting the Pieces Together	比較文化
社会・文化	Being a Working Women in Japan	学外
社会・文化	Bread in Japanese Diet	法学
社会・文化	Gift Giving in Japan	法学
社会・文化	History and Memory in Japan: The Case of Sexual Slavery	法学
社会・文化	Influence of Confucianism on Japan Society (Comparing with Korea)	留学生センター
社会・文化	Japanese Popular Culture and Its Influence in Thailand	学外
社会・文化	Korean Wave (Han-ryu) Phenomenon and Strategy of Culture Industry Development	経済
社会・文化	Miyamoto Musashi and the Way of Swords	学外
社会・文化	Pachinko in Japan	経済
社会・文化	Popularity of Japanese Comics and Animations among Teenagers and Adults	学外
社会・文化	The Evolution of Foreign Identity in Japanese Media	比較文化
生物学	Melanin biosynthesis inhibitor from edible and medical mushrooms	農学
生物学	Melanin biosynthesis inhibitor from edible and medical mushrooms	農学
日本語	Kanji-Part1: Basic Facts and Classroom Study	留学生センター
日本語	Dialects in Kyushu and Japanese People's Attitudes toward Them	留学生センター
文学・芸術	Contemporary Japanese Artists: Nishiyama Minako	芸術工学
文学・芸術	Designing a Pleasant Urban Scenery	芸術工学
文学・芸術	Contemporary Japanese Artists - Miwa Yanagi	芸術工学
文学・芸術	Japanese Culture And Spiritual World Reflected In Clay Figurines	芸術工学
文学・芸術	Reflections on the Architecture of Ando Tadao	芸術工学
文学・芸術	Bunraku a Cultural Icon of Japan	学外
文学・芸術	Is Yosano Akiko really the pacifist she is thought to be?	学外
文学・芸術	Japanese Contemporary Architecture: Metabolism	芸術工学
文学・芸術	The Use of the Shamisen in the Takeshi Kitano's Movie: Zatoichi	学外
法律・政治	Abduction・Abductees issues on Japanese Newspapers	法学
法律・政治	The Comfort Women Controversy 1991-2003:	留学生センター
法律・政治	The Extradition of Fujimori	法学
法律・政治	Legislative and Social Responses to Children who Kill	法学
法律・政治	The Role of China in Solving the Recent North Korea Nuclear Crisis	法学

分野	タイトル	指導教員所属
法律・政治	Japanese Methods of Punishment and the Prison	法学
法律・政治	The Socialist Movements in Japan and Korea	法学
歴史	Women in the Mass Urban Culture of 1920s Japan	留学生センター
歴史	The Making of the Meiji Constitution and The Power of the Oligarchy	法学
歴史	Government with No Nation: Democratic Discourse and Popular Notions of Rights in 19 <sup>th</sup> Century Japan	学外

表4 Field Study 実施例 (2004 - 2005)

実施月	宿泊	訪問先	内容
10	2泊	九重高原、阿蘇山、熊本など	オリエンテーション、異文化理解セミナー
10	1泊	西有田	農家ホームステイ、稲刈り
11	日帰り	大宰府	相撲部屋見学、太宰府天満宮
12	日帰り	姪浜保育園、内浜中学校	保育園、中学校見学
1	日帰り	楽水園 (福岡市博多区)	茶の湯体験
3	1泊	別府	再オリエンテーション、温泉文化
5	日帰り	北九州	TOTO、トヨタ自動車
6	1泊	有田、西有田	有田焼、田植
6	日帰り	梅林寺 (久留米市)	座禅、仏教

# 九州大学サマーコース

## Asia in Today's World (ATW) Programme

岡崎 智己\*

高原 芳枝\*\*

### 0. はじめに

本稿は昨年までの本プログラムの実施状況を受入実績とともに報告するものである。周知のように、本プログラムは2001年と2002年に試行的に実施された UMAP リーダーズプログラムを引き継ぐ形で2003年から開始された。プログラムの位置づけは、UMAP リーダーズプログラムの試行を終了した時点で大きく方向転換したが、プログラムの基本的な構成は当初の UMAP リーダーズプログラムのそれを踏襲している。そこで、まず本プログラムの先駆けとなった UMAP リーダーズプログラムの概略から紹介することにしたい。

### 1. UMAP リーダーズプログラム 2001・2002

UMAP リーダーズプログラムは、日本の大学が有する知的資産を活用し、アジア太平洋諸国の次世代のリーダー養成を支援することにより世界の安定と発展に寄与することを目的として2000年1月に開催された UMAP 理事会において日本から提案されたものである。以下に示すプログラム実施の条件が付され、本学と東京外国語大学の2校で2001年と2002年に限って実施された。

夏期休業中の約2ヶ月間に集中的に実施する。

英語による日本事情を背景とした講義科目を開講する。

その際、諸外国の大学の優れた教授陣を招聘するなどして多様な内容を提供する。

受け入れた留学生が修得した単位は UCTS を活用して在籍大学において認定する。

英語を教授言語とした短期集中型のサマーコースを実施することは留学生センターにとっても初めてのことであったため、教員と職員からなるワーキング・グループを結成し、同様のプログラムの実施実績を豊富に持つ私立大学を訪問して実施状況やプログラム運営上の問題点について聞き取り調査を行ったり、関係資料を収集したりしながら、実施計画が練られた。その際、特に注意が払われたの

---

\* 九州大学留学生センター教授

\*\* 九州大学国際交流推進室助手

は以下の点である。

参加者がコース内容に満足するだけでなく、帰国後の勉学にも役立つものとする。

優秀な参加者を継続して確保できる体制作りを行う。

アジア太平洋地域の諸大学に対し、本学の存在を周知する機会とする。

アジア太平洋地域の諸大学と単位互換を組織的、計画的に実施する契機とする。

また、毎回プログラム終了時には次年度のサマーコース開催に向けた評価（調査）を行うことも決定された。何度かの会合の後、プログラムの総括テーマを Studying Asia in an Era of Information Technology and Globalization に定め、以下の要領で受講者の募集を行った。

- 実施期間 1) 2001年7月2日～8月10日（6週間）  
2) 2002年7月1日～8月9日（6週間）
- 対象者 1) UMAP加盟国にあって本学と学生交流協定を結んでいる大学の学生(20名まで)  
2) 北米・欧州にあって本学と学生交流協定を結んでいる大学の学生（10名まで）<sup>1</sup>
- 開講科目 1) 人文・社会科学系「アジア研究コース」全6～7科目  
2) 自然科学系「実験実習コース」個別対応  
3) 日本語（初級前半～中級後半・全4レベル）

その結果、欧州からの応募はなかったものの、北米とアジア地域の学生交流協定締結校からは以下に示すような割合で受講者が集まった。また、「アジア研究コース」に関しては、それを本学の学生も自由に受講できるよう全学教育科目として措置したところ、2001年度は7人（聴講を含む延べ人数）、2002年度は36人（同前）が受講登録をした。

	USA	韓国	台湾	香港	シンガポール	フィリピン	計
2001年	5人	5人	4人	3人	3人	0人	20人
2002年	7人	5人	4人	5人	3人	1人	25人

人文・社会科学系「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況については以下の通りである。

「アジア研究コース」 開講科目・授業担当	受講者数	
	2001年	2002年
Understanding Contemporary Japan in the Global Age T. Mito & A. Cobbing, Kyushu University	17人	N/A
Globalization in China Today S. Lewis, Rice University	5人	4人
The Foreign in Japan's Self-image: the Role of China in Japan's Literary Culture N. Pinnington, University of Arizona	5人	N/A
Japan the Real, Japan the Imagined P. Caddeau, Amherst College	7人	21人

Japan and the Asia-Pacific in Modern Times S. Teow, National University of Singapore	3人	11人
Pre-modern China in Global Perspective R. Smith, Rice University	2人	N/A
Government and Politics in Japan I. Neary, University of Essex	3人	5人
Death in the Japanese Literary Tradition N. Pinnington, University of Arizona	N/A	10人
The Oceanic Revolution: Iberians in the Pacific, circa 1500-1650 S. Retana, Spanish Association for Pacific Studies	N/A	2人

自然科学系「実験実習コース」に申請して行われた自主研究と受入部局は以下の通りである。

<b>2001年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル</b>	<b>受入部局</b>
Meet with up-to-date medical treatment: Vaccine therapy for patients with far advanced malignancies	医学研究院
Analytical study of glycyrrhizin in Glycyrrhiza species by ELISA using anti-glycyrrhizin monoclonal antibody	薬学研究院
Determination of sennoside A and B in Rheum and Cassia species	薬学研究院
<b>2002年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル</b>	<b>受入部局</b>
Fluidic MEMS	工学研究院
Studies on Photofunctional Nano-materials	工学研究院
Molecular Biology-Analysis of genes: Mos, Cyclin, Chk1	理学研究院

6週間のプログラムを通して「アジア研究コース」と「実験実習コース」は午後に、そして「日本語」のクラスは午前中に配置した。そうすることにより、人文・社会科学系（アジア研究コース）と自然科学系（実験実習コース）のどちらのコースを選択しても、日本語の学習が行えるようにしたのである。なお、1回90分のセッションが14～15回行われる「アジア研究コース」は、プログラムの前半と後半に各々3～4科目を配し、受講者が各自の興味と関心に応じて一人計4科目まで履修できるようにした。<sup>2</sup> 科目によって受講者数にばらつきがあるのは、単純に受講者の関心の在り方を反映しての結果である。

日本語クラスについては、UMAP リーダーズプログラム参加者に限らず、すでに本学に在学する留学生にも受講を許可した。その結果、人数的には少数であったが、時間的に受講が可能で、かつ集中して日本語の練習を行いたいという希望を持つ留学生が2001年には9名、2002年には12名、学内から参加した。日本語クラスの構成と受講者数を以下に示す。なお、受講クラスを決定するに当たっては留学生センター日本語教育部門の専任教員によって筆記テスト（聴解テストを含む）と個別面談が

行われた。

	初級 1	初級 2	中級 1	中級 2	中級 3	計
2001年	10人	6人	5人	9人	N/A	30人
2002年	8人	5人	11人	7人	6人	37人

東京外国語大学で実施された同様のプログラムと比較して、特に九州大学のプログラムの特徴となったのは、人文・社会科学系のコースと自然科学系のコースの二つを設けたことであった。そして前者では日本を含むアジアに対する理解を深める講義科目を配置し、後者では本学の理工系及び医歯薬系の学部・大学院の協力を得て、実験・実習を中心とした自主研究の行える機会を提供した。こうしたプログラムの構成は、後継の ATW プログラムにも引き継がれた。

この他、UMAP リーダーズプログラムのために企画、実施され、ATW プログラムにも引き継がれたのは以下の四点である。

#### 民間学生寮の利用とホームステイの提供

プログラム開始から最初の4週間は民間の学生寮を利用し、その後は学内関係者、地元自治体等の協力を得て、一家庭一人の配置で2週間のホームステイを実施している。

#### 見学旅行の催行

「アジア研究コース」の授業内容とも関連して、プログラム参加者が日本の文化、歴史、生活習慣を総合的に理解し、あるいは現代の日本を実際に体験できる機会を提供すべく、プログラム実施期間中の週末を利用して以下の見学旅行等を企画・実施している。

- ・ 広島（平和記念資料館）と宮島（厳島神社）の見学<sup>3</sup> 一泊二日
- ・ 西有田・棚田での農作業体験 日帰り
- ・ 日本庭園・お茶室でのお茶会 日帰り

#### 日本人学生チューターの配置

初年度の2001年は9人の日本人学生チューター（本学学生）で20名のプログラム参加者をサポートする体制をとったが、それ以後は原則としてプログラム参加者一人に学生チューターが一人ずつつく1対1の体制でサポートを実施している。学生チューターの役割は、単に国際交流のパートナー役に止まらず、プログラム参加者が福岡空港に到着した時の出迎えに始まる初期適応支援、九大キャンパスのガイド役、見学旅行の同行者、日本語会話の練習相手、街歩きや「学外」活動の同伴等々、実に多岐にわたる。この制度は学生チューター自身の異文化理解や国際交流に関する意識の醸成にも大いに役立っており、プログラム参加者と本学学生の双方に益するものとなっている。

#### UCTS の活用による単位互換

UCTS が UMAP メンバー国の諸大学で相互に単位を互換するシステムとして広く認知されているとは未だに言い難い状況であり、また仮に UCTS の適用を認めた場合でも、学生が帰国後、それぞれの大学で改めて確認の試験や面談を行うケースも多いようである。しかし、UMAP 域内の学生交流を活性化させようとするとき、UCTS は極めて有効な制度である。事実、初年度の2001年はプログラムに学生を派遣した8大学中5大学が UCTS を利用して単位互換を行い、そ

の後も UCTS を適用する大学は、特にアジア域内で、少しずつ増えてきているようである。本学におけるサマープログラムは、単に一夏の日本体験を楽しむプログラムではなく、学問的にも充実したものとして内外に広く認知されることを目指しており、その際の質保証を目に見える形で示すという意味でも、今後とも UCTS の活用を推進していきたいと考えている。

## 2. ATW プログラムにおける変更点 2003・2004

前項では UMAP リーダーズプログラムの実施状況を概観するとともに後継の ATW プログラムにも引き継がれた点について述べた。ここでは、まず UMAP リーダーズプログラムが九州大学独自のサマーコース・ATW プログラムに変わって変更のあった点について述べ、ついで2003年と2004年の ATW 実施状況について報告する。

変更点の第一は、プログラムの参加対象者を本学と学生交流協定を締結している大学の学生に限らないとしたことである。この変更により、希望すれば世界のどの国・地域の大学の学生であっても本プログラムに応募できるようになった。

変更の第二点は、プログラム受講料を徴収するようになったことである。UMAP リーダーズプログラムでは参加者は全員本学と学生交流協定を結ぶ大学から来ており、それを交換留学生として扱っていた。従って、授業料も相互に免除するという協定の条項に基づいて、徴収していなかった。しかし、ATW プログラムを、6週間という短期間に集中的に開講する、通常の交換留学プログラム（半年～1年間）からは独立したサマーコースと規定し直したため、参加者全員から受講料、宿舍費、並びにホームステイ費用、そして見学旅行代を徴収することにしたのである。2004年を例に、費目別の料金を示すと以下のようになる。

基本受講料（3科目相当分）	¥ 86,400
宿舍費（朝食・夕食代を含む4週間）	¥ 40,000～50,000程度（宿舍により異なる）
ホームステイ費用（朝食・夕食代を含む2週間）	¥ 20,000
見学旅行代 <sup>4</sup>	
・ 広島・平和記念資料館と宮島・厳島神社の見学（一泊二日）	¥ 26,000
・ 西有田・棚田での農作業体験（日帰り）	¥ 2,500
・ 日本庭園・お茶室でのお茶会（日帰り）	¥ 800

変更の三点目としては、プログラムの修了要件を定めたことが挙げられる。これは ATW プログラムが勉学・教育を中止とした国際プログラムであり、所謂「楽しく過ごす一夏の体験」型プログラムとは一線を画すものであるということを明確に打ち出したが故の変更であった。とはいえ、ホストファミリーや日本人学生チューターとの交流や見学旅行への参加も含め、課外活動や個人的な日本探究にもそれ相当の時間を割けるよう配慮し、(1)最低3科目を受講すること、(2)プログラムの最初から最後まで全期間を通じて参加すること、の2点だけを修了要件とするに留めた。なお、3科目の数え方であるが、日本語クラスへの参加 = 1科目、「アジア研究コース」1科目 = 1科目、「実験実習コース」への参加 = 2科目である。受講者が希望する場合はもちろん3科目以上の受講も可能であるが、

その場合は追加分の授業料（1科目当たり¥28,800）を支払わなければならない。

変更の第四点は受講者の選抜を、本学の定める受入基準に基づいて、本学で行うことにした点である。UMAP リーダーズプログラムでは、受講者の選抜および推薦を全面的に交流協定校側をお願いしていた。しかし、先に述べたように、協定校以外の学生にもプログラム参加の機会を与えるべく門戸を開いたため、いろいろな大学から参加の申し込みが来ることになり、必然的に受講者の選抜を本校で行うようになったのである。もっとも、協定校から応募のある場合は、協定校側の窓口（通常は国際交流担当の事務部門、あるいは日本研究科のような部局）を通して応募をしてもらい、その際、協定校側＝送り出し側でも応募者についてある程度のスクリーニングをしてくれるよう、協力を要請している。

第五点目は、変更というより ATW プログラムになって新たに加わったことと言ったほうがよいのかもしれない。優れた資質があると認められた受講者には本学独自の奨学金を出すことにしたのである。これは学内の競争的経費からの支出で、2003年度には一人一律16万円で2人に、また2004年度には一人一律12万円で17人に支給された。この金額はプログラムへの参加費用（参加者の国から福岡までの旅費を除く）の約半分を賄う程度のものであるが、ATWプログラムへの参加を希望するものにとっては大きな励みとなっているようである。

### 3. ATW プログラム 2003・2004

ここでは ATW プログラムとなってからの実施実績について報告する。

	応募者数	受入許可者数	受講者数
2003年	117人	48人	20人
2004年	74人	59人	46人

実際に来学してプログラムを受講する学生の数が受入許可を出した者の数から減じるのは、受講者の側で種々の事情が生じて来日ができなくなったためである。2003年の場合はアジア地域における SARS の発症、蔓延が大きな阻害要因として働いた。このため受入を決定していた北京（3名）、上海（2名）、台湾（2名）、香港（5名）およびシンガポール（13名）の学生については、他の受講者や本学学生への配慮とプログラムそのものの運営上が困難となると判断されたことから、翌年度での優先的な受入を条件に、2003年度プログラムへの参加辞退をお願いし、来日を見合わせていただいた。2003年度での受入実績が大幅に増加しているのには、そうした事情があつてのことである。また、2004年度の応募者数が前年度を下回ったことにも、アジア域内で引き続き発症例の報告された SARS が関連している。なお、国・地域別の本プログラムへの受入状況は以下の通りである。

	UK	USA	韓国	シンガポール	台湾	中国	香港	タイ	マレーシア	計
2003年	0人	11人	6人	0人	0人	0人	0人	2人	1人	20人
2004年	1人	11人	8人	10人	4人	8人	4人	0人	0人	46人

また、年度別各コースの開講科目と受講の状況は以下の通りである。



2003年度「アジア研究コース」開講科目・授業担当	受講者数
Globalization in China Today S. Lewis, Rice University	14人
Japanese Religious Practice: Tradition and Modernity N. Yamabe, Ryukoku College	14人 + 13人
Cultural Anthropology-Tripping the borders: Performance, Negotiation, Gender and Japanese Socio-culture C. Maree, Toyo University	14人
Understanding 'Other' Cultures: Perspectives and Gazes Toshiko Sakamoto, Ritsumeikan University	13人

2003年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル	受入部局
Single Electron Tunneling Transistor	システム情報科学研究所

2003年度「日本語コース」(学内からの参加者6名を含む)

初級1	初級2	初中級	中級	計
6人	5人	9人	6人	26人

なお、上の一覧中、「アジア研究コース」の Japanese Religious Practice: Tradition and Modernity の受講者数が「14 + 13」となっているのは、この科目がその下に記載されている二つの科目 (Cultural Anthropology-Tripping the borders: Performance, Negotiation, Gender and Japanese Socio-culture および Understanding 'Other' Cultures: Perspectives and Gazes) とそれぞれペアになって開講されたためである。すなわち、後者二科目のいずれかを受講する学生は、前者を必ず受講することが義務づけられ、全14回のセッションのうち、前者の講義を担当する教員が5回分、後者の授業を担当する教員が9回分のセッション (= 講義・演習) を行うという形でコースが提供された。これは授業内容におけるコラボレーションという意味合いと、また教員の側で授業を担当できる日時の不具合を調整・解決するためという現実的な理由があって、このようになったものである。

2004年度「アジア研究コース」開講科目・授業担当	受講者数
Japan and the Asia-Pacific in Modern Times S. Teow, National University of Singapore	24人
Food and Agricultural Economics in Japan and Asia-Pacific S. Shinkai, Kyushu University	21人
Japanese Culture: Modernity and Tradition Y. Mouri, Kyushu University & N. Yamabe, Tokyo University of Agriculture	24人
Japanese Political Culture in Transition: An Alternative Model? D. Vanoverbeke, Katholieke Universiteit Leuven	13人

## 2004年度「実験実習コース」自主研究課題タイトル

Diatom (Bacillariophyceae) Texonomic Assemblages for Akkeshi Salt Marsh, Eastern Hokkaido, Japan

受入部局  
理学研究院

## 2004年度「日本語コース」(学内からの参加受入なし)

初級 1	初級 2	初中級 1	初中級 2	中級 1	中級 2	計
10人	8人	6人	6人	9人	7人	46人

## 4. ATW プログラムに対する評価と今後の課題

上で見てきたように、2001年に開始された UMAP リーダーズプログラムが、アジア研究を中心に据えた本学独自のサマーコース「ATW プログラム」に変貌を遂げ、すでに二夏が経過した。これまでに ATW プログラムに参加した学生はこのプログラムをどのように評価したのか、その一端をプログラム終了時に行ったアンケート調査の結果から示してみたい。

## 2003年度プログラム調査結果

「アジア研究コース」について (有効回答者数14人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	3人	5人	6人	0人	0人

「実験実習コース」について (有効回答者数 1人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	1人	0人	0人	0人	0人

「日本語クラス」と「アジア研究コース」或いは「実験実習コース」とのバランスについて (有効回答者数15人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	2人	7人	4人	2人	0人

## 自由記述によるコメント (英文から和訳して抜粋)

日本語初級者には (新しい環境に) 慣れるのに時間がかかるので、最初の2週間は日本語のみを学習できるとよい。あとの4週に「アジア研究コース」コースを開講してはどうか。

6週間という期間を考えると、全て日本語のプログラムでもよい。もし6週間より長く、時間的に余裕のあるプログラムなら「アジア研究コース」コースと組み合わせても無理はないだろう。アジアより日本を学びたい。日本語のみのプログラムであってもよい。

「アジア研究コース」はあったほうがよいが単発のレクチャーにするなどして日本語を重点化してはどうか。

ATW を選んだ理由のひとつは「アジア研究コース」が魅力的だったからだ。

「アジア研究コース」の内容がよかった。日本語のみのプログラムではよくない。自分の専攻は数学なので、どの「アジア研究コース」も新鮮でおもしろかった。

## 2004年度プログラム調査結果

「アジア研究コース」について（有効回答者数38人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	6人	21人	9人	1人	1人

「実験実習コース」について（有効回答者数1人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	1人	0人	0人	0人	0人

「日本語クラス」と「アジア研究コース」或いは「実験実習コース」とのバランスについて（有効回答者数38人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	11人	18人	8人	0人	1人

## 自由記述によるコメント（英文から和訳して抜粋）

日本語クラスと「アジア研究コース」の組み合わせにより、日本社会を総合的に理解できた。授業、通学時間、ホストファミリーと過ごす時間等を考えると、日本を実地に体験する時間の余裕があまりなかった。

ATW プログラムは「アジア研究コース」に重点を置いているようだったが、日本語にもっと集中したかった。「アジア研究コース」の予習、復習等に追われて、自由な時間があまりなかった。よく遊びよく学ぼうとする学生にはとてもよいプログラムだ。

アジア経済やアジア諸国間の協力関係についての「アジア研究コース」があればもっとよい。「アジア研究コース」がATW プログラムのポイントといえよう。授業では様々なバックグラウンドの学生たちの意見を聞き、議論できたことが非常に良かった。

プログラムの構成、提供されるコースの内容ともによくできたプログラムだった。期待を遥かに上回って満足した。

ここに挙げたのは受講者が残したコメントの一部にすぎないが、それでもこれまでの受講者がATW プログラムに何を期待し、実際にプログラムに参加してみて、その何を評価し、またどのような感想（満足・不満）を持ったかの一端を理解していただけるかと思う。

まず、プログラム全体への評価は概ね良好であると言ってよいだろう。これは年齢や言語および文化的背景の違いに加えて、1) 日本についての知識の有無、2) 日本語能力の有無および格差、3) 英語を母語とするかどうか、4) 選択した「アジア研究コース」のトピック/分野についての予備知識の有無等を考慮に入れた上で考えてみると、驚異的に「良い」評価を得ていると言っているように思う。

もっとも問題がないわけではない。評価が分かれる要因の第一は、このプログラムを「日本語の練習」を中心とするプログラムと考える（期待する）のか、それとも「日本を含めたアジアについての理解」を中心としたプログラムと考える（期待する）かにある。また、後者の場合も、そこで日本への比重をどの辺に置く（希望する）かによっても、本プログラムへの評価（満足度）は違って来るようだ。評価が分かれる第二の要因としては、日本語力、英語力の格差が挙げられる。この語学力の違

いが、日本語クラスやアジア研究コースの予習・復習に必要とする時間に大きく関係し、結果としてプログラム参加者が一日を、あるいは週末をどのように過ごす（過ごせる）かを大きく変えてしまう。そうした「個人的な」状況が、プログラムに対する評価や要求の違いとなって、上に掲げたコメントにも現れているようである。

第一の問題要因については、本プログラムは「日本語の練習」だけを行う、所謂「語学プログラム」ではないということを受講者募集の時点で明確にすることで、相当程度、回避できるように思う。1年目でこの問題に気がついてからは、プログラムの内容、目的、受講規定等々について、説明会やパンフレット、またホームページで十分に説明するようにし、「誤った期待」を持って本プログラムに参加することのないよう受講希望者に対して注意を喚起している。

問題要因の第二については、本プログラムのように言語・文化的背景を異にし、しかも大学での専攻も種々異なる学生を一堂に受け入れる短期の国際教育プログラムでは宿命ともいえる問題であり、解決策はなかなか見つからない。英語力については、応募時に英文エッセイの提出を義務づけており、また英語を母語としない学生については英語力を証明する書類を提出してもらって、英語力の確認を行ってはいる。それでも、日本人の例を挙げるまでもなく、テストで試される英語力と実際に役立つ英語力は似て非なるものであることが多く、英語の講義を聴いてノートをとり、英語でクラスメートと討論し、相当量の英文資料を読み、かつレポートも英文で書く、という作業を連日のように6週間続けるとするのは、なかなか大変な作業であろうことは想像に難くない。しかし、考えてみれば英語力の差によって各自の作業量や作業効率が違ってきってしまうというのは仕方のないこと、というより自然で当然なことなのではないだろうか。それは「政治」「経済」「歴史」「文学」「食料問題」「エネルギー問題」等々、その年々に提供されるアジア研究コースの専門分野・領域について、どの程度の予備知識を持っている（あるいは持っていない）かについても同様であるし、コンピュータ・リテラシーについても然りであり、日本語力についても同様である。あの学生はコンピュータ操作に詳しいから何かと得だ、あるいは漢字文化圏から来た学生は日本語のクラスでは有利で私は漢字が分からないから不公平だと言っても如何せん仕方のないことである。知らなければ（そして知りたいのであれば）知ろうと努める、分からなければ（そして分かりたいのであれば）分かってと努めるのが勉学というものであろう。知らないことを知り得るまでに、分からないことが分かるようになるまでに費やす時間と労力は、当然のことながら、各人で異なり、均等にはならない。大切なのは、それを障害とか不必要な不平等と考えるのではなく、自然で当然のこととして受け入れ、そうであればこそ助け合い、教え合って、共に学んでいこうという前向きで肯定的な「協学」の精神ではないだろうか。

6週間という限られた期間で、新たに蓄えられる知識の量はそれほど多くはないかもしれない。しかし、知識は量ばかりが問題になるものではない。その質こそが問われるべきものだ。そういった意味で、世界各地から集まった言語も文化も、それまで受けてきた教育も価値観も異なる同世代の若者が、日本という異文化の中で、共に暮らし、共に学ぶ中で味わう種々の驚きと発見は、期間が限られているが故に却って凝縮された質の変容を促す契機ともなる。それが証拠に、本プログラムに参加した学生たちは（本学の学生チューターも含めて）、プログラムが終了して帰国した後も、互いに連絡を取り合い、時には互いの国・地域を相互に訪問し合ったりしながら、本学で共有した経験と友情

を再検証する作業を熱心に続けている。本プログラムの企画・運営に携わる者の一員として、今後とも参加者が「協働」し、そこで学び、体験したことを後々まで誇れるようなサマーコース「ATWプログラム」を企画・運営し続けていきたいと思っている。

#### 参考文献

「公開シンポジウム『これからの大学と短期留学プログラム』報告書」平成14年3月

#### 注

1. 当初は本学の日本人学生も対象に含める計画であったがプログラムの開講期間と学年歴が合わない等の理由から初年度は日本人学生の募集は見送られた。但し、「アジア研究コース」に関しては、それをを全学教育科目として履修できるよう措置した。
2. セッション数（授業回数）については、2001年度は15回、2002年度以降は14回となっている。
3. この広島・宮島への見学旅行では、都合のつく場合は、往路でトヨタもしくはマツダの自動車生産工場の見学も行っている。
4. 見学旅行への参加・不参加は各自が選択、決定できる。

## 2004年度 九州大学留学生センター留学生指導部門報告

白 土 悟\*

高 松 里\*\*

### 1. はじめに

留学生指導部門は、(1) 留学生やその家族の相談に応じ、問題解決を図っていくという相談活動、(2) 留学生やその家族の適応上の問題を予防したり、異文化間で起こる問題について認識を高めたりする予防的・教育的活動を行っている。

相談活動には、修学や生活問題を援助するアドバイジングや心理カウンセリングから情報提供まで幅広い活動が含まれる。また、予防的・教育的活動には、新入生オリエンテーションやチューター・オリエンテーションにおける異文化での適応問題ガイダンス、授業や学生サークル(九州大学留学生会、九州大学国際親善会、九州大学ムスレム学生会)への助言を通じて、留学生の日本社会や文化への理解を促すとともに日本人の留學生理解を深める活動、教職員の留学生受け入れを支援する活動、地域の人々によるボランティア支援を促進する活動、留学生問題についての調査研究活動である。

### 2. 相談活動

#### (1) 相談期間と相談時間および担当者

相談期間は前期・後期の学年暦に沿って、月曜日から金曜日の午前10時から午後5時まで行った。また、4月の春季休業中(4月1日~10日)および8月・9月の夏季休業中(8月7日~9月30日)にも行っている。特に、春季休業中は、新入留學生が来日するので、受け入れ活動で最も忙しい期間であり、また夏季休業中の9月下旬も同様に新入留學生の受け入れ活動で忙しい時期である。また、冬季休業中(12月24日~1月7日)には各地ホームステイや一時帰国で大学を離れる留學生が多いが、そうでない留學生も少なくないので、国際交流会館では正月に餅つきや三社参りなどの行事を行っている。

留學生センター分室における相談担当者は、白土悟(月・火・水曜日)、高松里(火・木・金曜日)であり、国際交流会館では森山日出夫(会館主事)であった。相談担当日は、担当者の授業と重ならないように設定した。相談担当日以外には学生レポート指導やボランティア活動支援やガイドブック

---

\*九州大学留學生センター助教授

\*\*九州大学留學生センター助教授

等の作成および研究活動などを行っている。

## (2) 来談状況

分室における相談件数は表1の通りである。ここにいう相談件数には、ちょっとした情報提供は含まれていない。例えば、ホームステイの申込みについての説明で、幼児を連れて行っても良いかとか、どんなお土産を持っていったらよいかなどを尋ねてくるので、応答しているが、そういう1～2分間で済むような助言は含んでいないのである。こういうちょっとした問い合わせは非常に多く、これらに対する情報・助言の提供は重要であると思われるが、あえてカウントしていないのは、留学生に対する真に専門的援助がどれくらい必要とされているかを年々把握しておきたいと思うからである。

さて、2004年度は留学生からの相談は225件であり、「入学・進学関係」33件、「教育制度・内容」33件、「進路相談」22件であり、合わせて修学上の問題が88件(40%)であった。個別案件については守秘義務上ここに詳述しないが、大学院への進学相談や指導教授の教育指導への不満などは解決が難しく、留学生当人が何らかの決断と行動を取れるよう何度もカウンセリングを行ったものもある。

また、「日本人からの相談」も合計173件と多かった。特に、「外部」からの問い合わせとは、新聞記者の取材、国内企業への留学生就職を斡旋する人材派遣会社の事情聴取などに応じたのである。「学生」からの相談の中には、外国留学について助言を求められることがあった。

## 3. 予防的・教育的活動

### (1) オリエンテーション活動

4・5月及び9・10月の新入留学生に対する出迎え、オリエンテーションなど一連の活動は以下の通りである。同時に、センター分室においても、新入留学生を連れて教職員や在校生が来訪し、これに対応した。

#### 前期の新入留学生の初期適応支援(4～5月)

国際交流会館にて、会館入居書類等の説明、会館施設の使用方法の説明、寝具などの買い物支援、様々な質問に答える等、九州大学国際親善会の学生と共に活

表1 留学生の主要相談件数

留学生からの相談		2004年度 (平成14年)
修 学	入学・進学関係	33
	教育制度・内容	33
	進路相談	22
生	法律的問題	7
	経済的困難	7
	宗教的問題	0
	宿舎問題	2
	生活問題	8
	事故病気等	14
	渡日・滞日許可	2
活	人間関係	28
	子弟の教育問題	4
	帰国準備	2
	精神的不安定	20
	国保・一般保険	1
そ の 他	各留学生会	28
	その他分類不可	14
計		225
その他の外国人からの相談(注)		11
日本人からの相談(留学生関連)		
	学 生	48
	教職員	22
	外 部	103
計		173
総 計		409

1) 以上は、主要相談件数(面接に長時間を要するもの)であり、延べ件数である。(数人で1件と数える場合もあるし、1人が何度も来室している場合もある)

2) 厳密な分類は実際上困難であるため、上記は概数である。

3) 短時間で終わる簡単な問い合わせは含まれていない。

4) (注)で言う外国人とは、卒業生、訪問研究員、他学校の学生などである。

動した。

- ・ 4月1～7日：国際交流会館（香椎浜）にて新入留学生への相談業務の紹介（書類記入の手伝いなどは九親会学生が担当）
- ・ 4月9日：日本語研修コース学生を対象にキャンパスツアーを行う。  
健康科学センターの利用方法、留学生センター分室と相談の紹介、日本人との交流の場所、生協などについて説明する。
- ・ 4月22日：新入生オリエンテーションおよびチューター・オリエンテーション、日本での生活・適応について解説する。また、チューターには、チューターに期待すること、留学生の求める助言について説明する。「外国人留学生の相談指導のためのガイドブック2003年」・「留学生超入門」を配布し説明を行う。
- ・ 5月1日(土)：ムスレム学生会主催のイスラムセミナーにて挨拶（高松）  
後期の新入留学生の初期適応支援（9～10月）  
9月30日午前：留学生を支援する日本人ボランティアへのオリエンテーション  
9月30日～10月1日：JTW 学生と JTW 日本人チューターへのサポート  
10月4日～7日：入居・初期生活支援（日本語研修コース・日本語日本事情研修生・日韓共同理工系学部留学生）  
10月8日：キャンパスツアー（日本語研修コース・日韓共同理工系学部留学生）  
10月9日(土)：国際交流会館歓迎会  
10月10日(日)：天神ツアー(主催：サポートネットワークそら)  
10月10日：2005年度新入生（学部正規生）受け入れに関する打ち合わせ  
（六本松学生掛事務、九親会、高松）  
10月14日：受け入れ活動に関する反省会(九親会、サポートネットワークそら)  
10月21日：新入留学生オリエンテーション  
10月21日：チューター・オリエンテーション  
10月25日：新入生歓迎会（リーセントホテル）

## (2) 学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生交流関係の学生サークルの顧問となっている。いろいろな活動や要望に対して助言を行った。

### 九大留学生会（KUFSA）関係

- 4月：スポンサーミーティング（約40の地域交流団体との年間行事打ち合わせ）への助言
- 5月：芸術工学部留学生会との活動調整への助言
- 7月14日：KUFSA と芸術工学部留学生会との話し合い(19：00～21：00、留学生センター分室)
- 10月～12月：国際親善パーティ準備と実施の支援
- 1月8・9日：スマトラ沖地震該当募金集め参加（天神、太宰府天満宮参道）  
九州大学ムスリム学生会（KUMSA）関係



4月：イスラム文化セミナー準備への助言

6月：ハラルミート料理店の学内出店について支援（留学生課、生活支援課と相談）

9月：イスラム文化セミナー準備への助言

九州大学国際親善会(KUIFA)関係

4月17日(土)：新会員歓迎料理会（留学生センター分室）

5月：インターリンク（シンガポール学生との交流）への協力

7月～9月：六本松地区における新規企画「学生相談員」設置に関して助言する。学生相談員とは「ピア・サポート制度」を、留学生対象に行うものである。また、留学生センター内でカウンターを開設し、昼休み時などに日常の質問（バスの乗り方、買い物の仕方、携帯の買い方、書類の書き方等）に答える活動を4月から始めるに当たって助言する。

2月：新入生チューター支援・受験生案内などについて助言する。

C-Club (Communication Club) C & Cプロジェクト、依頼により高松が顧問となる。

1月21日：交流パーティ開催（留学生センター分室）

2月18日：交流パーティ開催（留学生センター分室）

### (3) ボランティア団体の指導・助言

福岡フレンドリークラブの活動への助言と講義

九州大学には家族同伴の留学生が約300人いる。300人近くの夫人たちやその子供たちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、九州大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（12：30～14：20）および交流会（14：30～16：30）である。これら活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。毎年1回、ボランティア育成講座として指導部門教員が講義を行っている（12月1日）。

ボランティアグループ そらの活動への指導助言

このグループは、社会人の留学生支援を目的とし、留学生の引越しなど個別援助や交流行事の支援などを行っている。その活動について毎月第3木曜日（19：00～20：30）定例ミーティングおよびその他の木曜日の作業ミーティングにて指導・助言している。

主なものは、5月24日（土）総会、留学生への調査実施（5月）、メンバー新規募集準備（6月）、メンバー新規募集準備（7月）、新規参加希望者への説明会（9月12日）、第1回新人対象研修会（9月16日）、第2回新人対象研修会（9月19日）である。

### (4) 地域との交流活動の推進

地域団体による留学生との親睦交流や留学生に対する支援活動の窓口として、留学生会との連絡調整や助言を行っている。表2は、2004年度に留学生指導部門で取扱った地域交流行事である。

表2 2004年度 留学生の地域交流行事

4月3日	梅の植樹祭(太宰府天満宮・天神スタンプ主催、留学生会・留学生指導部門教員など10名)
4月3日～4日	ヒッポホームステイ(8名)
4月17日	保育園での交流(慈生園主催、5名)
5月29日～30日	ガタリンピックホームステイ(鹿島市、30～35名)
6月19日	保育園交流会(4名)
6月19日	九州大学留学生会ダンスパーティ(国際交流会館、約70名)
6月26日～27日	ヒッポホームステイ(7名)
7月3日(土)	保育園での交流会
7月17日18日	小石原ホームステイ(10組)
7月31日～8月9日	ジャパントント(金沢、2名)
7月9日	九大会(OB会)と留学生会との交流
7月31日～8月9日	ジャパントント(金沢、2名)
8月1日～8日	ジャパントント(金沢、1名)
8月7日	保育園(慈生園)ジョイントサタデー(4名)
8月7日	すのこ小学校すのこ祭り(20名)
9月16日	保育園(慈生園)ジョイントサタデー(4名)
9月18日	九州大学留学生会バスツアー(100名)
9月19日	インドネシア・チャリティデイ(中央市民センター)
10月17日	市民講座(1名講師として参加)
10月17日	国際交流協会ホームビジット交流会(10名)
10月23日	ヒッポホームステイ(7名)
10月24日	国際親善料理交歓会(中村学園大学、20チーム80名)
10月31日	会館まつり(九州大学国際交流会館)
11月3日(水、祭日)	小石原村体験旅行(福岡国際交流センター、40名)
11月9日	企業見学会(日本学生支援機構福岡支部、50名)
12月3日	九州大学留学生会国際親善パーティ(三鷹ホール、約150名)
3月26日(土)	太宰府天満宮観桜会(九州大学留学生会、約100名)

## 4. 授 業

## (1) 大学院・学部課程における授業

留学生指導部門教員の2004年度の大学院人間環境学府および学部（全学教育の個別教養科目）における担当科目は、表3の通りである。

表3 大学院・学部課程における担当授業

	前 期	後 期
大学院	「留学生教育政策論」 (金 6、白土)	「留学生アドバイジング論」 (集中、白土) 「異文化適応論」 (集中、高松)
学 部	高年次履修科目「日本事情」 (火 1、森山) 「世界の中の日本」 (火 3、高松) 「日本事情」 (水 4、高松) 「留学生交流論」 (金 1、白土) 「大学とはなにか」 (水 4、1回、白土)	「世界の中の日本」 (月 3、白土) 「日本事情」 (水 4、森山)

なお、表3の「世界の中の日本」および「世界の中の日本」は、留学生指導部門教員と全学の留学生専門教育担当教員によるリレー授業である。その内容は以下の通りである。

前期「世界の中の日本」(火曜日3限目、コーディネーター：高松)

第1回(4月13日)：高松 里「全体のオリエンテーション(10分ほど)」

坂口晴一郎「デザインとエンジニアリング」

第2回(4月20日)：土居 克実「日本の生物多様性とその利用1」

第3回(4月27日)：土居克実「日本の生物多様性とその利用2」

第4回(5月11日)：土居克実「日本の生物多様性とその利用3」

第5回(5月18日)：古屋忠彦「日本人が食べてきたもの1」

第6回(5月25日)：古屋忠彦「日本人が食べてきたもの2」

第7回(6月1日)：古屋忠彦「日本人が食べてきたもの3」

第8回(6月8日)：寺本憲功「食習慣と健康維持1」

第9回(6月15日)：寺本憲功「食習慣と健康維持2」

第10回(6月22日)：高松 里「日本人とストレス1」

第11回(6月29日)：高松 里「日本人とストレス1」

第12回(7月6日)：吉田冬樹「環境と材料1」

第13回(7月13日)：吉田冬樹「環境と材料2」

なお、受講者は280名(留学生は10名程度)であった。

後期「世界の中の日本」(月曜日4限目、コーディネーター：白土)

第1回(10月4日)白土 悟「講義の目的」

第2回(10月18日)白土 悟「日本文化の課題(1)」

- 第3回 (10月25日) 白土 悟「日本文化の課題 (2)」
- 第4回 (10月26日) 八谷まち子「グローバル化の課題 (1)」
- 第5回 (11月1日) 八谷まち子「グローバル化の課題 (2)」
- 第6回 (11月8日) 米光 靖「伝統的地場産業の世界との関わり (1)」
- 第7回 (11月15日) 米光 靖「伝統的地場産業の世界との関わり (2)」
- 第8回 (11月29日) 松隈浩之「デザイン論 (1)」
- 第9回 (12月6日) 松隈浩之「デザイン論 (2)」
- 第10回 (12月13日) 中西恒夫「コンピューターと数学の知識」
- 第11回 (12月20日) 中西恒夫「日本語と情報・通信：日本語情報処理」
- 第12回 (1月17日) 中西恒夫「日本語と情報・通信：多国語情報処理」
- 第13回 (1月24日) 白土 悟「課題演習」

なお、受講生は48名（留学生は7名）であった。

#### (2) 留学生センターにおける授業

留学生センターの「日本語研修生コース」において前期・後期「日本事情」および日韓理工系学部留学生の予備教育コース」において後期「日本事情」を講義した。

## 5. 研究活動

留学生に関する研究調査活動およびその成果は以下の通りである。

#### (1) 著書論文

- ・白土悟『留学生アドバイジングー学習・生活・心理をいかに支援するか』（共著）、ナカニシヤ出版、2004年12月
- ・白土悟「異文化間カウンセリングの今日的課題」、異文化間教育学会編『異文化間教育』第20号、アカデミア出版、2004年、4-10頁、
- ・白土悟「アジアへの留学の意義」、日本学生支援機構編『留学交流』vol.16、no.6、ぎょうせい、2004年、2-5頁
- ・白土悟「留学生と日本人の交流の意義と実践」（中国高等学校外国留学生教育管理学会にて発表、上海国家会計学院、9月18～27日）
- ・高松里『セルフヘルプグループとサポートグループ実施ガイド』金剛出版、2004年9月

#### (2) 科研費助成研究

- ・平成15・16・17年度文部科学省科研「日米豪における留学交流戦略の実態分析と中国の動向」（白土、研究分担者）
- ・平成16・17・18年度文部科学省科研「異文化間教育の横断的研究」（白土、研究分担者）

#### (3) 学会活動

- ・5月28～30日：異文化間教育学会（同志社大学、分科会司会、白土）
- ・6月26・27日：日本比較教育学会（名古屋大学、分科会司会、白土）

- ・ 9月3・4日：日本人間性心理学会（東京、高松）
- ・ 10月23・24日：異文化間教育学会・紀要編集委員会（一橋大学、白土）
- ・ 11月2日・16日：日本人間性心理学会大会準備委員会（九大、高松）
- ・ 11月27・28日：九州教育学会（九大、分科会司会、白土）
- ・ 12月4日、13日、4月22日：日本人間性心理学会準備委員会（九大、高松）
- ・ 12月11日：異文化間教育学会理事会（東京、白土）
- ・ 1月23日(日)：異文化間教育学会研究紀要編集委員会（一橋大学、白土）

## 6. 社会連携

### (1) 社会団体関係

留学生問題や国際教育に関する社会団体、公共団体委員会において活動を行った。

以下の通りである。

[2004年]

- ・ 4月20日：東警察署協議会（委員、白土）
- ・ 6月22日：国際ビジネス人材支援会議（福岡県庁、幹事、白土）
- ・ 6月30日：国際ビジネス人材支援会議総会（中小企業振興センター、幹事、白土）
- ・ 7月1日：国立大学法人留学生指導研究協議会（東京大学、九州沖縄地区幹事、高松）
- ・ 7月17日：福岡帰国留学生交流会総会（福岡学生交流会館、副会長、白土）
- ・ 8月23日：JAFSA 理事会（日本大会館、理事、白土、）
- ・ 9月29日：東警察署協議会（委員、白土）
- ・ 11月19日：第四大都市圏アジア交流推進事業・国際教育研究会（県企画振興部、白土）
- ・ 12月2日：東警察署協議会（委員、白土）

[2005年]

- ・ 2月7日：第四大都市圏アジア交流推進事業・国際教育研究会（県企画振興部、白土、）
- ・ 2月10日：日本学生支援機構月刊『留学交流』編集協力者会議（東京国際交流館、白土）
- ・ 2月17日：福岡国際関係団体連絡協議会第100回記念交流会（天神ビル、白土）
- ・ 2月24日：東警察署協議会（委員、白土）

### (2) 講演・研修会など

講演・研修会などに置いて、講師を務めている。以下の通りである。

[2004年]

- ・ 5月10日：福岡県警察学校にて講演（高松）
- ・ 5月13・14日：JAFSA（特定非営利活動法人・国際教育交流協議会）初任者研修会講義担当（滋賀県、14日9：00～12：00「受け入れの実務 - カウンセリングを中心に」、高松）
- ・ 5月19日：RKB放送「アグネスチャンさんと留学生の懇談撮影」（九州大学、白土）
- ・ 7月11日：佼成カウンセリング研究所講演会（東京、高松）

- ・ 7月17～19日：「エンカウンター・グループ・セミナー」（九州大学、高松）
- ・ 7月28日：福岡県警察学校にて講演（高松）
- ・ 8月9日：福岡県警察学校にて講演（高松）
- ・ 9月10～12日：JAFSA 中上級者研修会「外国人留学生アドバイジング」講師（軽井沢日本大学研修所、白土）
- ・ 9月12・13日：JAFSA 大会にてポスター発表「国際交流会館の運営について」（軽井沢日本大学研修所、ハウジング部会、白土）
- ・ 10月22日：福岡県警察学校にて講演（高松）
- ・ 10月23日：広島大学ピア・サポーター養成講座にて講演（広島、高松）
- ・ 11月25日：福岡県警察学校にて講演（高松）
- ・ 12月8日：福岡地域留学生担当者共同研修会（福岡留学生交流推進協議会と JAFSA 共催、福岡リーセントホテル、白土）

## [2005年]

- ・ 3月1～4日：香川大学保健管理センター・セミナー講師（香川県、高松、）
- ・ 3月9～11日：日本学生支援機構主催：国際シンポジウム「グローバルをめざした留学生と地域との交流」コメンテーター（東京国際交流館、留学生地域交流事業協力者会議委員：白土）
- ・ 3月10日：森山先生退職記念講演会（九州大学国際ホール）
- ・ 3月12日：森山先生退職記念祝賀会（九州大学国際交流会館ホール）
- ・ 3月23～27日：「多文化間相互理解ワークショップ」にスタッフ参加（奈良県、高松）

## (3) 学外からの来訪者

留学生指導部門では学外からの来訪者があり、留学生指導状況等について説明するなど、対応している。2004年度の主な来訪者は以下の通りである。

## [2004年]

- ・ 7月20日：慶応大学国際交流センター 手塚千鶴子先生 来訪
- ・ 8月16日：塩川雅美氏（谷岡学園）来訪。芸術工学部留学生担当者と懇談。
- ・ 12月1日：バングラデシュ元留学生来訪
- ・ 12月6日：株式会社テクノスマイル国際事業部来訪
- ・ 12月13日、1月12日：九州大学留学生会元会長（何向東氏）来訪
- ・ 12月22日：都留大学千葉教授ほか来訪

## [2005年]

- ・ 1月27日：九州経済産業局緒方氏ほか来訪
- ・ 1月29日：九州大学留学生会元会長（王道元氏）来訪
- ・ 2月2日：立命館アジア太平洋大学スチューデントオフィス担当者来訪（2名）
- ・ 3月3日：香港グッドジョブ・クリエイションズ来訪

以上

## 執 筆 者

(執筆順)

大 神 智 春	九州大学留学生センター助教授
岡 崎 智 己	九州大学留学生センター教授
小 山 悟	九州大学留学生センター助教授
因 京 子	九州大学留学生センター助教授
清 水 百 合	九州大学留学生センター教授
鹿 島 英 一	九州大学留学生センター教授
今 井 亮 一	九州大学留学生センター助教授
高 原 芳 枝	九州大学国際交流推進室助手
白 土 悟	九州大学留学生センター助教授
高 松 里	九州大学留学生センター助教授

## 編 集 委 員

(50音順)

今 井 亮 一	九州大学留学生センター助教授
清 水 百 合	九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター紀要 第14号**

発行日 2006年2月 発行

編集・発行 九州大学留学生センター  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
☎092-642-2142

印刷・製本 城島印刷有限公司  
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6  
T E L 092-531-7102  
F A X 092-524-4411